

江戸・明治時代の庶民風俗(続)

— 茶筌・びいどろ鏡・文机・枕 —

付論「江戸・明治時代の庶民風俗」(補遺)

西村俊範

要 旨

前稿に引き続き、江戸・明治時代の庶民風俗に関連する項目から、茶筌・びいどろ(ガラス)鏡・文机・枕の四つを取り上げて述べた。

煎じ茶で用いられる茶筌は庶民層の用いる低廉な必需品で、煎じ茶が上質化して茶筌が不要となってゆく19世紀まで販売が続いていた。特に、空也上人の系譜に連なる京・空也堂の念仏聖たちは中世以来、自らの市中を廻る勤行に併せて茶筌を売り歩いた。その画像を集成して3期に区分した。

青銅鏡からガラス製の鏡への移行過程は江戸・明治期に当たるが、その具体的様相は考究されていなかった。文献・画像資料の両面から、江戸期にすでに小型の懐中鏡と大型の姿見に一定の割合でガラス製品が含まれており、特に懐中鏡には国産ガラスの使用が考えられることを述べた。併せて明治前半の移行期の様相を考察した。

文机には江戸前半期までは大きな変化が認められなかったが、中期・18世紀半ばに至って唐机が導入され、後期・19世紀からは抽斗付きの机が主流となってゆく。その様相を画像資料を時代順に追うことで確認した。

枕は江戸前期の17世紀半ばに縦向き木枕(箱枕)、中期の18世紀半ばにあづち枕が登場することによって大きく様相が変化していった。その木枕・あづち枕が特に女性の髪型の変化に対応して出現したものであったことを、浮世絵を中心とする画像資料から考察した。また、あづち枕の使用が女性の伝統的な髪型が継続していた大正期まで同様に継続していることを文献・画像資料の両面から示した。

はじめに

前稿に引き続き、江戸・明治時代の様々な庶民風俗に関連する項目から、茶筌・びいどろ鏡・文机・枕の四つを取り上げて述べたい。前稿同様に注が大変煩雑となっている。これは、関連する資料をできる限り集積してすべて隠さず公開・明示して、今後の研究の迅速な発展に資するための資料集の性格も併せ持たせたいと意図したためである。ご寛恕賜れば幸いである。また、文末に前稿の補遺を付したのも同様の意図によるものである。資料が汗牛充棟状態のこの分野では、完璧な資料収集など期し難い。ましてや後に続く研究者が一から資料集めをするなど時間と能力の浪費でしかない。時間と能力は筆者の到達点の先で使っていただきたいと思う。

1. 茶 筌

(茶筌)

茶筌は国語辞書の類には茶の湯で用いられるものとして解説されることが多いが、江戸時代以前には煎じ茶でも用いられた。『和漢三才図会』(正徳3年, 1713)にも「煎茶を掻き振って立つ泡は粗く大きい。」と記しており、『嬉遊笑覧』⁽³⁾ 卷十(文政11年序, 1828)にも「…是寛永中、江戸大路の水茶屋の躰なり。価は一服一銭なるべけれど、是は晩茶を煮て茶筌にてたつる也。」・「むかしは都鄙ともに、晩茶の煮たるを茶筌にてたてて飲たり。」と記している。このような習慣は庶民が普段喫する煎じ茶(日常の茶、常の茶)の質が次第に上質化するとともに18世紀中に廃れて稀なものとなっていった。⁽⁴⁾ 前述の『嬉遊笑覧』⁽⁵⁾ 卷十一にも「今は煎茶を泡だてて飲こと廃れぬれば、茶せん売らずなるべし。陸奥の人語りしは、奥の方にては薦僧茶筌を售といへり。そは今も煮茶をふりたてて飲ことある也。」と記している。19世紀には次第にごく地方にのみ残る習俗となったことが窺える。

屋代弘賢は文化12・13年頃(1815・6)に、「諸国風俗問状」なるかなり詳細な質問書を日本全国に配布してアンケート調査を行い、各地からの回答を求めた。⁽⁶⁾いくつかの回答書が現存していて柳田国男も注目していた。そのうちの『備後国福山領風俗問状答』には「また山村老婆、茶をふり泡をたてすすめ候を茶ふるまひとも申候よし。これも城下近辺には無之、其外には不承候。茶人の式とは別様に候。」・「乞食・穢多并にささら摺・茶筌の類、所々に御座候。茶筌はふり茶(煎じ茶)の茶筌、また草履等作り候も有之。」といった記述がある。各大名の城下町は参勤交代の影響が及んで江戸の風習が伝わり易いのでこれは想定範囲内であるが、煎じ茶に茶筌を用いる風習は広島・福山領全域で考えても相当稀なものになっていた様相が見て取れる。この風習が現在でも習俗として残る地域があるが、真に貴重な有形・無形の文化遺産と言える。⁽⁷⁾

煎じ茶用の茶筌は茶の湯用のものに較べて粗製であった。『関八州繫馬』⁽⁸⁾(享保9年、1724)には「御用ならば一本が六文、青竹茶筌でお茶ちやと立つるを召しませい。」とあって、茶の湯ではほぼ用いられないような材質も悪く作りも粗雑な安価な品であったことが窺える。『雍州府志』⁽⁹⁾卷七(貞享3年、1686)には、後述する京・空也堂の茶筌売りの茶筌を「しかれども、籠工にして、煎茶を滾ずるの用に充つるのみ。」と記している。当然茶の湯の茶筌とは販売経路も異なってくるわけで、『京雀跡追』⁽¹⁰⁾天部(延宝6年、1678)では「ちゃせんや ちゃのゆ」と「ちゃせんや つねの」は区分けして表記されており、『諸国萬買物調方記』⁽¹¹⁾(元禄5年、1692)も「京の分」の中で「茶せん つねの」とやはり茶の湯とは区分けして表記している。

では、京以外の地域では、煎じ茶用の茶筌はどのように売られていたのであろうか。各地の様相は詳細不明であるが、備後・福山領同様に下層民が作って自ら売り歩いていたのではと考えられる。ただ二か所、江戸・浅草の浅草寺観音堂と奈良二月堂では場所を決めての販売が行われていた。⁽¹²⁾『近世奇跡考』(文化元年、1804)には、浅草楊枝見世の始原の条に「寛永の頃(1624~44)は、店をかまへず。ちいさき長櫃のやうなものうへに、

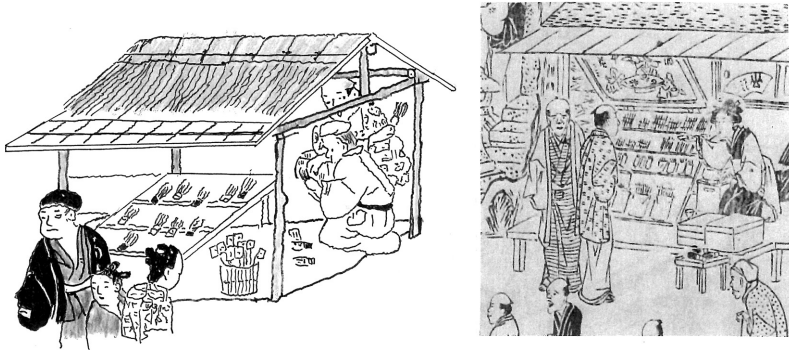


図1 浅草寺茶筌店・楊枝店

左—『江戸風俗絵巻』(浅草の巻, 享保5・6年, 1720・21)より西村作図
 右—『江戸名所図会』巻6(天保7年, 1836), 国立国会図書館デジタル
 コレクション

茶筌と楊枝をならべておきて、売りけるよし。……案るに、むかしはたて茶をのみ、もちゐたれば、茶筌をかふ人、今よりもおほかりつらん。」と述べている。『宝暦現来集』巻七(天保2年, 1831)にも「安永天明の比(1772~89)迄は、老人朝茶を汲て、茶筌にて立る時は茶泡立ける。是を好みて呑たる者也。いまはなきか。田舎老人には適には有之が、その比は浅草観音地内楊枝見世には、家毎並べて売しもの、近比は餘り見かけず。」としているので、浅草寺では楊枝見世の兼業として19世紀前半まではかろうじて命脈を保っていた可能性が残る。少し時代が下るが『守貞謄稿』巻二十七(嘉永6年, 1853)にも「昔は、今日(七月十日)、(浅草寺)境内において茶筌を売る。茶筌も今の黍のごとく、数店を出し買ふなり。これ昔は、平日も挽茶を専用とする故なり。寛政に至り、自づからこれを廃す。」・「今世も隨身門(二天門)内の楊枝店一、二戸のみ古風粗製の筌を売る。茶讎所用の物よりたけ長し。」と記しており、細部を除けばほぼ一致した証言が得られる。浅草寺での茶筌売りの画像は唯一『江戸風俗絵巻』(18世紀, 大英博物館蔵, 図1左)に見ることがでる。仁王門(宝蔵門)の傍、恐らく観音堂との間の道に壁のない柱のみの小屋掛けをして蓆を敷き、斜めの板

に茶筌を10本ばかり無造作に並べた様子が描かれている。楊枝店で売られる以前の大変古様な姿を示している。『江戸名所図会』巻6(天保7年、1836)では楊枝店の店先に張り出して小型の四角い台を置いて茶筌を売っている(図1右)。その並べ方も不揃いで、これは常時の定番商品の販売の様相とは思えない。⁽¹⁶⁾

また、『雲萍雑誌』巻二(文化11年、1814)には「奈良の二月堂にて、むかしは青竹にて茶筌を売り、老若男女、これをととのへて、詣でたるしりしとしてかへりぬ。家にありては、是をもて茶をたて、客をもてなすこと、南都の風なり。今はこの茶筌絶えてなし。」と記す。浅草同様にやはり集客力のある場所、少し遠方の人々でも定期的に繰り返し訪れるような繁華な場所が選ばれていたと思われる。買う側から見ても、そのような場所は日常に使う安価な品を、いつ訪れてもついでに手軽に入手できる気安い場所であったろう。⁽¹⁷⁾ 廃れた時期も江戸に近似する。⁽¹⁸⁾

(茶筌売り)

京・空也堂(中京区蛸薬師通堀川東入)は空也上人ゆかりの寺として知られ、空也の受戒名にちなんで光勝寺極楽院を本来の名とする。『空也上人絵詞伝』⁽¹⁹⁾(天明2年、1782)によると、天曆5年(951)に京に悪疫が流行って多くの衆生が亡くなった折に、空也が清水寺で自ら観音像を彫って念仏を唱え、茶を煎じて茶筌にてよりたて、まず観音に供し、それより衆生にふるまって病魔を鎮めたとされている。また、「枯杭集」巻三(寛文8年、1668)には、空也が三歳で鞍馬に捨てられたときに春日大明神が守護に遣わした猿と鹿を、鞍馬の荘官が射殺して無益な殺生を行った話を載せる。空也は荘官を改心させて得道させ、各地を布教して赴く折のために、茶筌作りを教えてこれで身命をつなぐようにと仰せつけたと記している。ために、空也堂の半僧半俗の門徒たちは普段は生業として茶筌を作って京の町を売り歩いた。『ゑ入年中重宝記』⁽²¹⁾(元禄7年、1694)によると門徒たちは11月13日の空也忌から12月28日の結願までの間、洛中の墓所・葬場を巡り、

願文を唱えて修業する。昔は鉢(鉦)を叩いたが今は瓢箪に変わったと記す。最初は念仏や上人の作った法曲を唱えて瓢箪を叩いて市中を巡る勤行(図2-1・2)と茶筌の販売行脚は別のものであったらしいが、後には茶筌売りも瓢箪を叩いて回るようになったために両方併せて「空也堂鉢叩き」と呼ばれるようになった⁽²²⁾。

古くは『京雀』⁽²³⁾ 卷五(寛文5年, 1665)にも「又常には鉢叩きども茶筌を作りて売侍る。」とある。『懷硯』⁽²⁴⁾ (貞享4年, 1687)には伏見・京橋の旅籠屋での茶筌売りの様子が記され、『続明烏』・『茶筌売』(安永期)にも京の街中で売り歩く姿が記されている⁽²⁵⁾。京独特の風習として定着していた様相が窺える。『(京都名物)富貴地座位』⁽²⁶⁾ (安永6年, 1777)では、稻荷山松茸・祇園町香煎などと並んで空也堂茶筌が名物の部に入れられている。この風習の終末に関しては資料が乏しい。『京華要誌』⁽²⁷⁾ (明治28年, 1895)は「今尚ほ其遺風を伝ふ。」・「山城志に優婆塞二十戸とあれども、いまは大に其数を減せり。又茶筌を製し之を鬻く。」と記し、漆間元三氏も第二次世界大戦前は大晦日に売りあるいたと述べられており、細々と続いて次第に衰退したものと思われる⁽²⁸⁾。

この鉢叩き・茶筌売りの画像資料(図2)がかなり残る。茶筌売りに限れば16世紀前半に遡る「洛中洛外図屏風」⁽²⁹⁾ 歴博甲本(町田本)が最も古く、すでに瓢箪を叩いている(図2-3)。以後、同じく洛中洛外図の上杉本から幕末に至るまで、相当数の画像を確認できる。いずれも一本の杖の上端に藁を束ねたもの⁽³⁰⁾ (弁慶)を巻いて、そこに多くの茶筌を刺して担ぎ、大半が瓢箪を携えて歩いている。茶筌を売らない鉢叩きのみの画像も15世紀以前にある程度の数があるが、空也系の遊行聖の鉢叩き^{かね}とその他の念仏勧進聖の区別は問題が残るので、ここでは鹿杖または瓢箪のいずれかを持つことを空也系のシンボルとみなして選別しておく⁽³¹⁾。時代による様態の違いがかなり明瞭で、大きく3期に区分できる⁽³²⁾。

第1期(16世紀まで)—衣装はまちまちの色の、無地か無地に近い小紋の素襖の上衣ばかりを羽織る。頭部は前を半剃りにして後ろで短く



1



2



3



4



5

図2 鉢叩き・茶筌売り

- 1—『融通念仏縁起絵巻』(来迎寺本, 14世紀, 模写), 東京国立博物館蔵
- 2—『融通念仏縁起絵巻』(禅林寺本, 14世紀, 模写), 東京国立博物館蔵
- 3—『洛中洛外図屏風』(歴博甲本, 16世紀), 国立歴史民俗博物館蔵
- 4—『人倫訓蒙図彙』巻7(元禄3年, 1690), 国立国会図書館デジタルコレクション
- 5—『都名所図会』巻1(天明6年, 1786), 国立国会図書館デジタルコレクション

髪を束ねる者が多い。足は多くが脚絆をつけるが、何も履かない素足がほとんどである(図2-1・2・3)。

第2期(17世紀)―明暦4年(1658)の『京童』の図からは弁慶が肥大化して大きく見える。衣装の図柄が鷹の羽紋や千鳥紋・袖摺(肘から上部)の並行する細線のようなかなり大きく目立つものに変化した。『宝蔵』⁽³³⁾(寛文11年, 1671)にも「茶に鷹の爪の名あれば、茶筌售は鷹の羽の袖をかづき、茶筌松(尖った松葉)の袖摺のしるべとなるも、皆その類によれる物なるべし。」と述べていてよく符合している。脚絆に草鞋履きとなり、頭部は第1期と変わらない(図2-4)。

第3期(17世紀末以降)―衣装が墨染の僧衣風のものに変化して図柄が無くなる。これは以後幕末まで一様である。空也上人の門徒が黒衣を着て茶筌を売り歩いたとする『和漢三才図会』⁽³⁴⁾(正徳3年, 1713)の記事とまさに符合している。前述の『空也上人絵詞伝』(天明2年, 1782)で空也に随伴している人物は総髪に近く被り物がないが、それ以外はすべて布製の頭巾を被るようになる。そのため頭上は隠れるが、いくつかの例では第1・2期に近いと思われる。足は草鞋履きが多い(図2-5)。明治以降の市中を売り歩く画は1例しか探しえておらず実態がわからない。

枯らしていない青竹を用いた粗製の茶筌は、庶民が喫する安価な煎じ茶(挽茶・晩茶)に欠かせない必需品であった。それが空也系の門徒たちが全国的に長く命脈を保ちえた理由であったろう。また、19世紀に入ってその庶民の茶が上質化して次第に茶筌を必要としなくなっていったことは、彼らにとって大変な逆風であったろうことは容易に想像がつく。19世紀に入ってからの茶筌売りの画像資料は数も多いが、それは彼らの生業としての意味合いは既に相当に薄れて、むしろシンボリックな宗教的行動になっていた可能性⁽³⁵⁾がある。

2. びいどろ(ガラス)鏡

(鬢鏡・姿見)

江戸時代までの鏡はほぼすべてが青銅製品で、江戸期には主に同鑄の柄がついた大小さまざまな柄鏡が用いられていた。このうち、小型のものは鬢鏡と呼ぶ。⁽³⁶⁾『日葡辞書』では「男の用いる小さな鏡」としている。『歴世女装考』⁽³⁷⁾(弘化4年, 1847)も「古き柄つきのかがみはみなちひさし。これをば鬢鏡といひ」と言っている。実際に、『洛中洛外図屏風』⁽³⁸⁾(鳥根県美本, 元和年間, 1615~24)では二条城脇の床屋で男が使っている画像がある。『好色五人女』⁽³⁹⁾(貞享3年, 1686)では「(男が)びん鏡取出して面を見るこそやさしけれ」と書いており、『一刻価値万両回春』⁽⁴⁰⁾(寛政10年序, 1798, 図3左)でも男が手に持っている。鬢のほつれ等を直すというだけではなく、今の手鏡という意識で広く使われたと思われる。また、女性用には三つ折りに畳んだ財布や筥迫の間に仕込んで懐に入れられる小型の長方形の懐中鏡⁽⁴¹⁾(図3右)も用いられた。『好色訓蒙図彙』⁽⁴²⁾(貞享3年, 1686)によればこれらも同様に鬢鏡とも呼ばれたようである。

一方、特に大型のものは姿見と呼ばれた。⁽⁴³⁾『室町殿日記』(慶長中頃, 1600年過ぎ)には「ある鏡の径八寸五分(25.8cm)ありけるすかたみを取いたし給いて礪せ給ふ。」⁽⁴⁴⁾と言い、『孕常盤』(宝永7年, 1710)では「浄瑠璃御前は姿見のますみの鏡に向ひ給へば、十五夜・冷泉(共に侍女の名)衣紋つくろひ参らする。」と、間違いなく今の姿見の用途に用いている。従って、我々が通常姿見と認識するような大きなサイズのものではなくとも、その当時の通常のサイズの鏡に比較して大きければ姿見と呼ばれたと解釈する必要がある。画像資料でも、少し大きいかと思う程度の大きさの鏡を鏡台・鏡架にかけて、少し離れて距離を置いて覗き込む例が幾つか見られる。⁽⁴⁵⁾それでも姿全体を見るにはサイズのいささか不便であったろう。この鬢鏡と姿見の中間のサイズのものが、家庭内で鏡台・鏡架の上に掛けられて、



図3 鬢鏡・懐中鏡

左一『一刻働万両回春』(寛政10年序, 1798), 国立国会図書館
デジタルコレクション

右一『春色恋染分解』(万延元年, 1860), 早稲田大学図書館蔵

すぐ近くで覗き込んで見る用に用いるごく通常のサイズの鏡だったということになろう。

前稿で触れたが、燈籠鬢と呼ばれる鬢が横方向に大きく張り出す女性の髪型が、安永年間(1772~81年)から江戸で大流行する。また、文金島田のように上に張り出す髷も流行った。このため、通常のサイズの鏡では髪型全体を映すことが大変困難になってきた。このような状況の変化への対応として、鏡は18世紀の後半から目立って大型化してくる⁽⁴⁶⁾。ただし、直径20cmを30cmにすると面積は2倍以上になるが、原材料も同時に2倍以上必要になる。当時はただでさえ銅銭の鑄造に用いる銅の確保にも難渋している状況であり、より大きな鏡を生産することには自ずと限界が生じて

いたであろう。しかも大型化すれば重量的にも扱いが難しくなる。そのような状況の中で、ガラス鏡にも一定の役割を果たす存在となる余地が生まれていたと考えられる。

(びいどろ鏡・ガラス鏡)

永積洋子氏が江戸時代の中国船(唐船)によるガラス製品の輸入の実態を明らかにされている。⁽⁴⁷⁾それによれば、資料の残る宝暦4年(1754)以後文化9年(1812)までの期間の内の12年に限ってであるが、総計で1600枚ほどのガラス鏡の輸入が確認されている。⁽⁴⁸⁾これはあくまでも資料が残るものに限っての話であり、またオランダ船も同様にガラス鏡をもたらしたと想定しておくべきであるので、⁽⁴⁹⁾実際の輸入ガラス鏡の数量は相当多かった可能性がある。一方、国内でのガラス生産はまだ不明な点が多いが、⁽⁵⁰⁾18世紀前半までには各種ガラス器の生産が広まっていたと考えられている。当時はガラスとは呼ばず、薄手のものはびいどろ、厚手のもので彫りなどを加えたものはギヤマンと呼ばれていた。このびいどろを用いた鏡(びいどろ鏡)の生産となると時代を遡れる文書に乏しい。僅かに19世紀に入ってから和泉国・岸和田領で鬢鏡(懐中鏡)の生産が行われていたことが確認されている。⁽⁵¹⁾年間生産量は20センチ角のものが3千枚、5～6センチ角が4万枚程度とされている。20センチ角のものはカットすれば鬢鏡(懐中鏡)となるが、⁽⁵²⁾5～6センチ角のものはいささか小さすぎるように思われる。

また、各種文献を調べてみると、びいどろ鏡の語例は『交替盤栄記』⁽⁵³⁾(宝暦4年、1754)に「此御かた美しき事ひいとろにかけうつるおやまの人形のことし」とあるのが古く、安永5年(1776)に日本を訪れたC.P. ツンベルグは『日本旅行記』⁽⁵⁴⁾に「日本人は猶白硝子及び彩色硝子の製法を知ってゐる。然し窓硝子用の板硝子を作ることは未だ試みてゐない。硝子を曲げたり磨いたりすることにはかなり成功してゐる。硝子で鏡を作り、又望遠鏡さへ作る。それで日本人は和蘭人から硝子を買ふのである。硝子製法は欧羅巴人から傳へられたものであるが…」と記している。18世紀にはすで

にガラス鏡が存在していたことは確実である。また、司馬江漢の『江漢西遊日記』には、大坂滞在中の江漢が天明8年(1788)に「硝石板を造ると云者を尋ね」と記し、同年十月には長崎のびいどろ細工屋に「板ヒイトロ伝授す」、翌年三月には京にて「ビイドロ板吹様をおしへる」と記されており、学んだ小型板ガラスの技術を早速伝えている様子が読み取れる。⁽⁵⁵⁾従って18世紀半ばには国産の板ガラスは確実に存在しており、それを用いた鬢鏡(懐中鏡)程度の大きさの鏡には純国産品があったことが十分に想定できる。

(画像資料)

次に画像資料に見えるびいどろ鏡を見てみたい。⁽⁵⁶⁾『歴世女装考』(弘化4年, 1847)の中で岩瀬百樹(山東京山)は「柄鏡」の項に「唐物硝子鏡(図4左), たて二寸七分(8.2cm弱)・よこ一寸七分(5.2cm弱)全質玳瑁細工かがみ硝子絵やう彫あげ図の如く転柱をあぐれば内にびいどろ鏡あり。按に今市中にてひさくびいどろかがみはかかる唐物を模し作りはじめたるならん。是も五六十年以来の新製にて今は下輩万家の重宝たり」と記す。寸法からみてこれは懐中鏡に相当する。現存する青銅製の懐中鏡もほぼ9cm×6cm程度の大きさである。弘化から60年を遡れば天明・寛政頃ということになるが、この蓋を転柱で開閉するスタイルのものは『通世界二代浦島』⁽⁵⁷⁾(天明4年, 1784)にすでに古い例(図4右)を見ることができる。以後も継続して使用されており、『商工技芸浪華の魁』⁽⁵⁸⁾(明治15年, 1882)にも「鬢鏡」の名称で図が出ている。日本製のものは唐物が全体が玳瑁細工であるのとは異なり、鏡を入れる容器(枠)は木製と考えられる。19世紀の岸和田ではこの容器を製作する職人はガラス製造業者とは別に「鏡鞘師」と呼ばれており、その材料には白木が使われた。⁽⁵⁹⁾江戸期には現在の鏡のような硝酸銀を用いた銀引き法はヨーロッパでも未だ発明されておらず、ガラス面に水銀を直接薄く塗布しただけの水銀引き法で制作していた。それでも従来の青銅鏡に比較すると映りが良いと考えられたようで、鏡に映った自分の姿に自惚れるからということで「自惚鏡」とも呼ばれていた。⁽⁶⁰⁾『指面草』(天明



図4 懷中鏡(ガラス)

左一『歴世女装考』巻1(弘化4年, 1847), 国立国会図書館デジタルコレクション

右一『通世界二代浦島』下巻(天明4年, 1784), 国立国会図書館デジタルコレクション

6年, 1786)にすでに用例があり, 幕末までこの名でも呼ばれて続けている。従って, 18世紀後半以降には, 唐物(あるいはオランダ製)・国産の小型ガラス鏡が一定の割合で使用されていたと考えておくべきであろう。なお, 『守貞謄稿』⁽⁶¹⁾後集には遊技の一つの半弓の場で, 金的・銀的の的中者に歯磨きあるいは硝子鏡等の景品を出したと記している。やや特殊な例となるが, 両国こりばの芝居小屋では, 価16文で番付と歯磨きを売ったことが記されており, 硝子鏡もこれからあまりかけ離れた価格だったとは考えられない。普及の一証左となろう。

一方, 18世紀末の寛政年間から各種画像資料の中に, 縦長長方形の相当大型品と考えられる鏡が数多く見受けられるようになる。管見の限りでも⁽⁶²⁾30例を超えている。人物との対比からもまさに今の大型姿見に当たるものであり, 女性や子供が手持ちしている例(図5左)があることから考えても,



図5 大型姿見

左一『忠臣合鏡』（文政12年，1829），早稲田大学図書館蔵

右一『釈迦八相倭文庫』14編上（嘉永3年，1850），早稲田大学図書館蔵

これらはまず重量の軽いガラス鏡と推定される。⁽⁶³⁾ この大きさに国産品は当時ありえないので，輸出品かあるいは枠のみを国内で設えた加工品かか
 ずれかと考えられる。⁽⁶⁴⁾ 『釈迦八相倭文庫』第十四編上（嘉永3年，1850）には，
 背面に「天下一」の文字と鶴亀の図柄が入る例（図5右）がある。これなど
 は全くの空想の産物でない限り枠のみが国産の加工品としか考えられない。
 『偽紫田舎源氏』第16編下⁽⁶⁵⁾（天保5年，1834）には櫛製の平べったい箱の両
 面に板ガラスをはめ込んで作った金魚用の水槽が見える。人物との対比か
 らはガラスの1辺が1m近くはありそうな大きさである。技術的には大き
 な輸入ガラスの加工ができるレベルに達していたと考えておくべきであ
 ろう。

では，鏡台や鏡架に掛けられるいわば通常のサイズの鏡には，ガラス鏡
 が含まれる可能性は皆無であろうか。幕末に江戸浅草茅町でガラス製造・

販売を行っていた大隅源助の包紙兼用の引札が⁽⁶⁶⁾残されている。その中に見えるガラス鏡は青銅鏡そっくりの円形の柄鏡の姿で描かれ、柄にはこれも青銅鏡と同じく籐が巻かれている。大きさは不明ながら、布で周囲を包んだ姿に描かれていて、そのまま漆箱に入れて鏡台に掛けられていてもおかしくない姿に見える。可能性を残しておくべきであろう。使用される板ガラスが国産か否かは残念ながら確認はできない。

(明治時代)

明治時代に入ると、ガラス・ガラス鏡の輸入量は次第に増加してゆく。明治20年までには、輸入板ガラス使用によるガラス鏡主流の時代になり、国内でも水銀引きではない硝酸銀使用の銀引き技術も習得し、1尺程度までのガラス鏡の加工生産が本格化していった。⁽⁶⁷⁾大型国産板ガラスの生産は明治42・3年からと相当遅くなる。画像資料を見ると、小学教授本の『第五単語図』⁽⁶⁸⁾(明治9年、1876)では「鏡、青銅・硝子にてつくり、容貌を写し見る者なり。」と説明している。また、『小学入門図解』(明治9年、1876)や『通常物問答図解』(明治10年、1877)ではガラスの裏面に水銀を塗ると説明しており、⁽⁶⁹⁾当時は相変わらず銀引きではない水銀引きの技法が主流だったと思われる。すべてが銀引きのガラス鏡にはまだ置き換わっておらず、青銅鏡・水銀引き鏡との共存が続いている。『商人名家東京買物独案内』⁽⁷⁰⁾(明治23年、1890)を見ても、幕末以来のガラス製造業者である加賀屋がランプ・眼鏡・銅鏡・磁石を主要営業品目に挙げていて、何と青銅鏡の名までもが出ている。ようやく明治30年の『昆石雑録合載袋』⁽⁷¹⁾の「絶て廃れしものは」の中に「青銅鏡(からかねかがみ)」が見える。『風俗画報』⁽⁷²⁾223号(明治33年、1900)にも「(富山の田舎でも)今は種々の玻璃鏡大小となく發明し而かも安きにより鋳物の鏡はおのつから廃れ…」などと書かれており、大正の初期でも大阪の鏡店で青銅鏡用の鏡台が未だ陳列されていたという事から見ても、⁽⁷³⁾青銅鏡から銀引きガラス鏡へと交替してゆくのは明治20年代後半が一つの目安で、19世紀一杯かかっていると言えようか。明治

前期の不安定な政治・社会状況も影響して、交替にかなりの時間を要したと考えるべきであろう。

明治期の鏡の変遷をうかがう画像資料は数多い。『続世界商売往来』⁽⁷⁴⁾（明治5年序、1872）には角度調節のできる姿見が「照身鏡」の名で掲載されている。一方『大阪朝日新聞』⁽⁷⁵⁾（明治32年、1899）には夜店の鏡屋で多くの手鏡が標本陳列のように並べて売られている。また、『画探新題』三篇（明治22年、1889）と『風俗画報』（明治23年、1890）・『浪花嵐東男』（明治24年、1891）では床屋の壁に額入りの大型ガラス鏡が登場している。⁽⁷⁶⁾『商人名家東京買物独案内』⁽⁷⁷⁾（明治23年、1890）にはすでに姿見や額縁も扱う硝子板間屋が何軒も存在していて、輸入板ガラスとそれを加工したガラス鏡が相当に普及し始めていた様相がみてとれる。

ガラスについてもガラス鏡についても、江戸・明治を通じて現状はまだまだ資料的にすべてが見通せる状況にはない。特に画像資料のみでは使用される板ガラスが国産か否かを識別できないことが障害になる。ただ少なくとも江戸も後期の19世紀からは小型の鬢鏡・懐中鏡も大型の姿見も、ガラス製品がある程度普及していたという事は事実として認定できると考えている。

3. 文 机

（18世紀）

畳敷きの室内に於いて書き物や読書をするために用いる家具に文机（書机）がある。江戸時代当初には長方形の机板の両端近くに四角の棒状の脚をつけるか、または両端に一枚板の脚を取り付けて様々な形に装飾的に削り抜いたりといった形のものが主流を占めていた。また中には筆返しを付けたものも見られた。ところがその机の形が特に18世紀の半ばごろから大きく変化し始める。新しく出現したのは、四脚の先端がレ状に小さく内側に折れ曲がる特色を持つ、いわゆる唐机のスタイルのものであった。



図6 唐机

左一『草の枕』上冊(宝暦11年, 1761), 国立国会図書館デジタルコレクション
 右一『焼餅噺』上巻(安永9年, 1780), 国立国会図書館デジタルコレクション

それらは中国産のものとは異なり、材質がすべて紫檀などの唐木とは考えられず、ほとんどがそれ以前の国産材と同一材を使用したものと思われる。その意味で、脚が畳用に短くなって座机になっていることと併せて、厳密には「唐机風」と称すべきものかもしれない。いずれにしても机の形態の変化は著しく明瞭である。この時期は長崎を通じて中国文化の流入が活発な時期と重なっており、その一環だった可能性が高い。明和9年(1772)には『普茶料理抄』⁽⁷⁸⁾も刊行されているが、料理を供するテーブル(食卓)も当然ながら同じ脚を持つ中国式の卓子が描かれている。唐机の画像例としては古くは『絵のあした』・『草の枕』⁽⁷⁹⁾(共に宝暦11年, 1761)に例(図6左)があり、次いで『源氏十帖物ぐさ太郎』(芝居番付, 明和4年, 1767), 『女貞訓下所文庫』と『娘独婿八人』⁽⁸¹⁾(明和5年, 1768)に見られ、画像例が増えるのは明和期からとなる。これ以後は、古い形態のものも引き続き残るものの、幕末に至るまでの文机のうちの相当の割合を唐机が占めるようになっていく。

また、『吉原細見 里のをだ巻評』(安永3年, 1774)・『芋太郎屁日語咄』(安永7年, 1778)や『金銀先生再寐夢』(安永8年, 1779)・『風流仙婦伝』

『玉菊燈籠弁』・『焼餅噺』(図6右)(安永9年, 1780)などには軒並み壺に入れた孔雀の尾羽が机上に飾られており, 中国式の文房飾り・文房机を模倣しようと強く意識したことが窺える。⁽⁸²⁾『万の宝(傾城の学問)』⁽⁸³⁾(安永9年, 1780)には「けいせいに学問をこのみたるあり。つねに唐机などかまへ, 孔雀の尾を卓下にたて, 南京の肉入れなど, ぎょうさんにかざりたて, いろいろの書物をよみける所に」などと記されており, 学を恃む意識もほの見えてくる。孔雀の尾羽は以後も類例が多く, 大きく時代が下って『しん板おざしきどうぐ』⁽⁸⁴⁾(明治14年, 1881)に見える唐机にまで孔雀の羽が見える。

長時間実際に文机として使えば, 畳の同じ場所の傷みや同じ姿勢で座る使用者の脚への負担が生じる。『風流姫かすみ』(宝暦2年, 1752)や『風流略源氏 常夏』(明和7~9年, 1770~72)・『浮世風俗八景 俳者落雁』(安永4・5年, 1775・6)などでは一人用の額縁仕立ての敷物も出現している。⁽⁸⁵⁾以後も, 一枚布で仕立てた座布団も含めて多数の使用例が確認できる。明和・安永期に唐机が常用の家具として次第に定着していったとみなすことができよう。

(19世紀)

19世紀に入ると, 机にさらに大きな変化が起きる。抽斗の出現である。抽斗自体は18世紀中にいくつかの先行例を確認できるが,⁽⁸⁶⁾ 流行ってはいない。江戸後期の19世紀に入ると確認した文机の画像のほぼ半数が抽斗付きのもので, 残り半数が抽斗のない唐机という割合となる。机板の真下に付くものと両袖に付くもの(図7左)があり, どちらも持つものも多い。片袖の例は確認できない。これらは唐机の形態とは異なったものであり, 在来の国産の文机(書机)の発展形と捉える方が妥当であろう。唐机はほぼ抽斗を伴わないので, そこからの発展形とは考えづらい。袖に抽斗をつけると収納スペースができて便利となり, 抽斗の横幅が広いので, 机板の横幅も必然的に広がる。その分重量も重くなるので, 使い勝手としては一長一

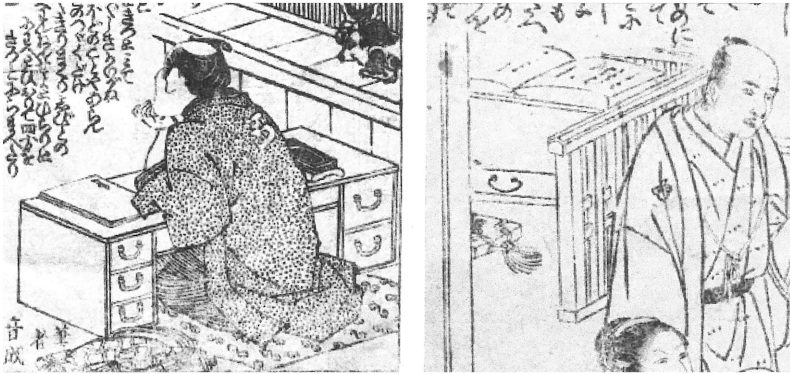


図7 抽斗付きの机・帳箱

左一『長壁太郎譚』巻6(文政6年, 1823), 国立国会図書館デジタルコレクション

右一『家伝寿命薬』上巻(天明2年, 1782), 国立国会図書館デジタルコレクション

短かもしれない。

抽斗の問題で、一つ注意したいものに帳箱・帳場机がある。帳場とは商売を営む店の中で、帳付けや銭勘定をする場のことで、ここにはもともと帳簿や書付などを入れておく木製長方形の帳箱と呼ばれる箱が置かれていた。この箱の上で実際の帳付けも行われており、机の機能も持ち合わせている。17世紀には確実に存在し、『西鶴織留』(元禄7年, 1694)にも「知恵の箱と見せさせ給ふは、諸商人其家々の帳箱なり。」などと書かれている。実際の画像でも、帳箱の側面には文政期まで「帳箱」と大きく墨書した例が大半を占める。かなり苦しい語呂合わせではあるが、どうやらこの大きな墨書には商人の心意気を示す目的があったようである。

この帳箱に抽斗がつく例があり、元禄期の『好色染下地』(元禄4年, 1691)では小口面に、『女蒙求艶詞』(享保14年, 1729)からは長辺側につく例(図7右)が僅かながら登場する。⁽⁸⁷⁾文機の引き出しも『江戸名物鹿子』上(享保18年, 1733)から確認できる。抽斗を唐机と関連させて考えることが難しい以上は、ともに類例が乏しいながら、この両者に18世紀の段階で一定の

関係性があったことも考えておく必要がある。帳箱はほぼこの形のままで明治期まで継続して使用されるが、同時に抽斗のついた文机に似通う帳場机もどこかの時点で出現してくるので、全く関わりがなかったとは想定しづらい。ただ残念ながらその具体的様相は確かめ得ていない。特に安永期以後は帳場に帳場格子という結界が巡らされるようになり、その中にあるものが机なのか箱なのかすら画像資料では全く見分けられなくなってしま⁽⁹⁰⁾う。従って両者の具体的な相互関係は、未解決の状態にとどめざるを得ない。

明治時代に入ると洋風建築が増加して、室内では脚の長い洋風机と椅子の生活が増加する。これは小学校から始まって次第に制度が整ってゆく学校の教室でも同様であった。一方で、一般の家庭の和風空間では江戸時代との大きな違いは認められない。明治7年(1874)の小学教授本『第一单語⁽⁹¹⁾図』でも机は短脚の唐机の形に描かれている。また、明治29年(1896)の『新按小学画手本⁽⁹²⁾』でも机の手本は机板の真下に横長の大きな一つの引き出しを持つ短脚の形で示されている。教科書や手本には、当時一般に用いられ、人々が机と言った時に真っ先にイメージするものが選択されることが普通であろう。唐机と抽斗付き機の併存が引き続き継続していたことが⁽⁹³⁾類推される。

4. 枕

(枕の種類・名称)

就寝の際には古代から一貫して枕が用いられている。画像資料を見ると、17世紀の江戸時代前期に入った頃の枕は、布袋の中に様々な詰め物をして両端を括った括り枕(図8-1)と直方体をした木枕(図8-2)で、ほかに中央が縊れた撥型枕(図8-3)がある。このうち、撥形枕は使われる材質に様々なものがあるが、数量的にはごく僅かであるものがある。木枕は木材から切り出した直方体の木塊も含まれた可能性はあるが、多くは木板を組み合わせ

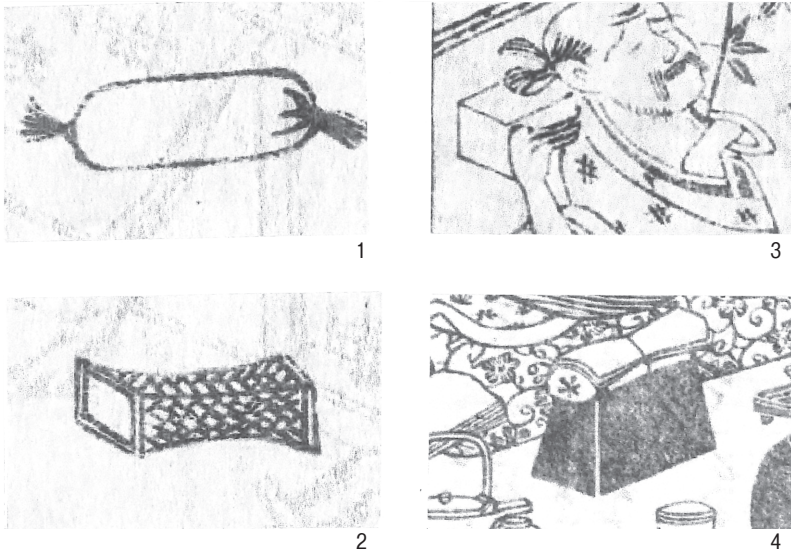


図8 江戸時代の枕各種

- 1—『女用訓蒙図彙』一(貞享4年, 1687), 国立国会図書館デジタルコレクション
- 2—『頭書増補訓蒙図彙』巻11(元禄8年, 1695), 国立国会図書館デジタルコレクション
- 3—『武家義理物語』巻6(貞享5年, 1688), 国立国会図書館デジタルコレクション
- 4—『同房語艶以登家奈幾』巻9(天保11年序, 1840), 早稲田大学図書館蔵

て木箱の形に作った木箱枕であった。『喫茶養生記』⁽⁹⁴⁾(承元5年, 1211)の桑木枕法にすでに「箱の如くに之を作り, 枕に用う可し。」と記され, 『日葡辞書』⁽⁹⁵⁾には「枕箱」の解説に「孔または口が開いた木製の枕であって, 中に入れてある香がその孔を通して薫り, 婦人が良い匂いに染まるもの。」とある。これは枕を入れる箱ではなく, 枕に用いる木箱という意味での解説である。江戸時代に入ると木枕あるいは箱枕と一般には呼ばれていた⁽⁹⁶⁾。

主要な枕の形式として一番最後(18世紀中頃)に登場するものにあづち枕(図8-4)がある。これは台形をした木箱の上に小型の括り枕を載せて結わえ付けたもので, 括り枕と箱枕の合体のようなものである。塚は矢を射る^{あづち}

弓場で的の後ろに設ける防護用の土壁のことで、形の類似による転用と思われる。⁽⁹⁷⁾『用捨箱』⁽⁹⁸⁾（天保12年、1841）には「あづち枕はいと近き製作なるべけれど、若き人は名だにも知らず。唯、枕といふ物と思ふもあるめり。…この枕なき前は、中人以下は皆箱枕なりしなるべし。」と述べている。19世紀に入るとあづち枕中心の時代になっていて、枕といえばあづち枕のことであり、それはごく新しいタイプのものだと認識されていた事が窺える。

ここで枕の名称に触れておきたい。名称で問題になるのは箱枕である。上述の通り、箱枕は江戸時代には木枕のことを意味していた。木箱を枕に用いることが多いために木箱枕の意味で箱枕と呼ばれた。18世紀にあづち枕が出現してからも、あづち枕の主要部分が木箱形に作られているからと言ってそれを箱枕と呼ぶことはなかった。⁽⁹⁹⁾『嬉遊笑覧』（文政11年序、1828）もあづち枕と箱枕（木枕）という言葉は完全に区別して用いている。先の『用捨箱』も含めて江戸期に書かれた考証本類は皆同様である。あづち枕を箱枕と称するようになったのは恐らくは明治になってからの事で、早くとも本来の木枕（箱枕）が廃れて、あづち枕を箱枕と呼んでも言葉の混同が無くなる江戸もかなり遅い末期からの事と考えられる。間違いなく箱枕という言葉の指し示すものがそこで変化している。そのため明治以降の文献から、直近の研究書類に至るまでがすべて箱枕=あづち枕という用法に倣っている。用法の変化はまさに歴史の一部であるが、研究書・論文までがその変化を無視してしまうと問題が生じる。

その点を辞書もうまく説明できていない。角川書店『角川古語大辞典』（1982年～）にはあづち枕の項目がなく、箱枕の項目であづち枕の説明しかしていない。小学館『日本国語大辞典』（再版、2000年～）には箱枕の項目であづち枕のみの説明を行い、なおかつ用例には本来の箱枕（木枕）のものまで挙げている。さらに木枕の項目にあづち枕の説明も含めている。前田勇『江戸語大辞典』（1975年）には木枕の項目がなく、箱枕の項目であづち枕の説明のみをしている。穎原退蔵『江戸時代語辞典』（2008年）では箱枕の項目がなく、木枕の項目であづち枕の説明のみをしている。大久保忠国

・木下和子『江戸語辞典』(1991年)では木枕の項目がなく、箱枕の項目であづち枕の説明のみを行っている。木枕の項目がないにもかかわらず、枕当という枕に付けるカバーの項目の説明では、木枕をあづち枕の意に解して説明している。『広辞苑』(第7版, 2018年)も木枕・箱枕の項目であづち枕の説明しかしていない。これでは枕の実情が全く把握できない。特に木枕をあづち枕と説明することは完全な間違いである。6種の辞書すべてが不適切で不正確で辞書の体を全くなしていない。

箱枕の意味が転換する時代を跨いで、枕の変遷を考察する本論では、あづち枕はあづち枕と表記し、箱枕・木枕にはあづち枕の意味は一切含めないこととして、表記に紛れが生じないように一線を画しておきたい。

(燈籠髷以前)

次に江戸時代の枕の変遷を辿ってゆきたい。括り枕と箱枕(木枕)中心の枕の様相に大きな変化が起こるのは18世紀半ばからである。林美一氏は特に女性の髪型と枕の形態の関連性に着目して論じられた。⁽¹⁰⁰⁾「寛永期を過ぎたころから髷の工夫が行われて女性の髪型が後ろにせり出すようになった。そのため就寝の際に不便で邪魔になるために枕の工夫が始まる。特に明和期からは従来横向きに使用していた木枕を縦向きにして使う方法が案出された。さらに髷が大きく横に張り出す燈籠髷の出現に併せる形で、箱枕(正しくはあづち枕)が安永4・5年から本格的に出現する。」氏の考えをまとめると大略このようになる。枕の変遷をここまで具体的に捉えようとした論考は他にない。

ただし、画像資料を概観してみると林氏の考えとはいささか異なった様相が見えてくる。まず、髪型に合わせて木枕を縦向きに使用する方法(図9左)は『吉原恋の道引』⁽¹⁰¹⁾(延宝6年, 1678)まで確実に遡り、林氏が表示されたものよりはるかに早い。そのため結果的に、縦向き木枕を寛永期以後の髷の工夫が始まる髪型の変化への対応策と考えた林氏の論をより補強することになったかと思われる。この方法は以後も嘉永・安政期まで用例を

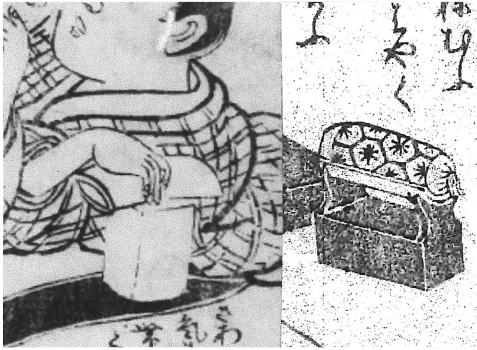


図9 縦向き木枕・刀掛枕

- 左一『艶女玉寿多礼』(享保4年, 1719), 国際日本文化研究センター蔵
 右一『艶道増加が見』(明和6年, 1769), 国際日本文化研究センター蔵

形⁽¹⁰³⁾の枕(図9右)が『座敷八景 手拭かけ帰帆』(明和3年頃, 1766)から出現する。以後も大正期まで続いて用いられている。枕の一つの形式になっているとみなすべきである。これを刀掛枕と呼んでおきたい。この枕は江戸における燈籠鬢の出現に遥かに先行している。むしろそれ以前の鶴鶴髷への対応として、木枕を縦向きに用いるよりははるかに安楽な方法として考案されたものではないかと思われる⁽¹⁰⁵⁾。

(燈籠鬢)

枕についてが一番重要な問題にあづち枕の出現がある。林氏は女性の髪型・燈籠鬢の出現に着目されていたので、この新しい髪型に合った新しい枕としてほぼ同時期に出現したものがあづち枕だったと考察された。確かに、江戸におけるあづち枕の出現はいずれも安永4年(1775)の『呼子鳥』と『色道三津伝』(図10-1・2)が確認できる⁽¹⁰⁶⁾。燈籠鬢の出現と全く同年であり、その意味で氏の説は一見妥当のように見える。ただ、前稿でも述べた通り、燈籠鬢は本来上方(京)ですでに明和期に始まっていた髪型であっ

⁽¹⁰²⁾確認でき、江戸前期から始まり江戸後期まで継続されたことがわかる。つまり、この方法は後ろの髷だけではなく、燈籠鬢流行以後の横に鬢が張り出す髪型への対策としても有効と認められていたものと考えられるのである。また、あたかも刀掛けのように全体の形が中間を透かしたものになり、頭に当たる部分に刀が乗るように小さな括り枕が乗る

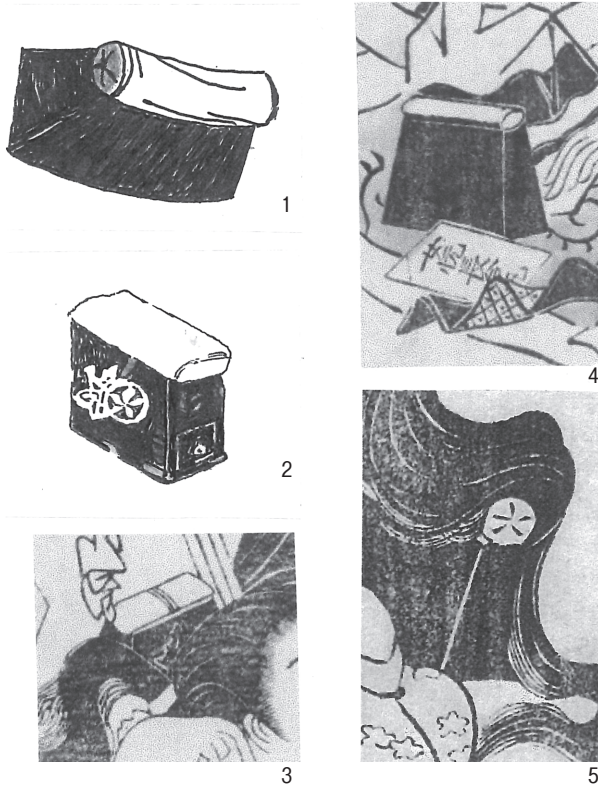


図10 あづち枕の初現

- 1—『呼子鳥』(安永4年, 1775)より西村作図
- 2—『色道三津伝』(安永4年, 1775)より西村作図
- 3～5—『笑本春のにしき』(明和年間), 国際日本文化研究センター蔵

て、江戸が始原ではない。従って上方で燈籠鬢の登場に合わせて新しい枕が登場していたか否かを確認しないことには、その対応が上方由来のものなのか江戸での新たな工夫なのかは決められないことになる。図10-3・4・5はともに上方の絵師・北尾雪坑斎の『笑本春のにしき』(明和期)⁽¹⁰⁷⁾に描かれる枕である。図10-3は黒い箱型の上に御簾紙様のものを乗せて、中

央を紐で箱に括り付けている。図10-4は台形の箱の上に小枕が乗る。図10-5は上の小枕の片方の括りがよく見える。共に以後のあづち枕の表現に常用される手法である。この枕は三つともあづち枕と見て間違いなく、明和期の上方面にあづち枕がすでに出現していたことはほぼ確実と言える。ただ、『笑本春のにしき』では女性の髪型がすべて鶴鴿髷に表現されていて燈籠髷が見当たらない。画像資料の性質上、描かれているものを「ある」ということはできるが、描かれていないものを「ない」とは断言できない。従って、あづち枕は燈籠髷という髪型への新たな対応として出現したのか、あるいは鶴鴿髷への対応として先に出現していたのかは現状では確認が困難である。ただ、浮世絵による限り、江戸には燈籠髷とあづち枕はほぼ同時にあたかもそれが1セットのものであるかのように導入されたことは確実である。その意味で林氏の説は両者の江戸への導入がほぼ同時期であったことを正しく捉えていたものとして評価し直すことができよう。

(燈籠髷以後)

あづち枕の出現を契機として枕には大きな変化が起こった。これ以後、画像資料に見える枕のおおよそ7・8割程度は男女を問わずあづち枕が占めるようになる。あづち枕が髷や髻の張り出した髪型に最も適した枕として支持されたことは間違いのない。括り枕がこれに次ぎ、木枕(箱枕)・撥形枕・刀掛枕は消滅はしていないものの極めて少数に止まるようになる。特に木枕(箱枕)は安政期以後の確実な例を確認しておらず、明治期の画像資料が見当たらないことも考えあわせると、幕末あたりで廃れた可能性が考えられる。枕は老若男女問わずに使用するものであるため、様々な枕が併存することはむしろ当然である。あづち枕が突出して多く描かれることは、この枕が幅広い層で歓迎され使用されていたことの反映とみるべきであろう。

(明治期以後)

明治期に入っても、枕は相変わらずあづち枕主流の時代が続いた。『東京風俗志』⁽¹⁰⁸⁾(明治31年, 1898)は「枕は男には坊主枕(括り枕)を多しとし、婦女には舟底枕(あづち枕の一種、底が緩くカーブする)多く用ひられ、次いで安^あ土枕、撥形(碓枕)も用ひらる。」と記している。ただ、明治期の画像資料を見ても男性があづち枕を使う例が極めて多く、髪型が丁髷か断髪に関わらず用いられている。記述との整合性を求めるとすれば、明治になって30年ほどの間に、つまり19世紀末までの間に、男性は次第に断髪が増えるとともに、使い慣れた丁髷に適したあづち枕から次第に寝やすい括り枕を用いるようになるという方向性があったと考えるしかなかろう。そう考えれば相変わらず日本髪が主流である女性の枕があづち枕とその変形で底を緩くカーブさせて寝返りを楽にした舟底枕から変化しなかったことも頷ける。世紀末に書かれた小説『初すがた』⁽¹⁰⁹⁾(明治33年, 1900)には「笠田は障子を明けて、暗い屏風の中へ静かに入り、「未だお目覚めぢゃないのか」……擬緞子の夜具布団、転げ落ちてる括り枕は天鷲絨の房付、お俊は蒔絵の箱枕(正しくはあづち枕)に髪も乱れて、背後向きに黙って臥ているのである。」といった描写が見える。これなどは括り枕=男性用という認識がないと意味深長な描写が理解できなくなってしまう。更に時代が下がって『大阪パック』⁽¹¹⁰⁾第11年第10号(大正5年, 1916)にも、括り枕・あづち枕・刀掛枕の3種がいまだに男性用の枕として描かれている。枕の変化に関しては人々の意識は極めて保守的であったと思われる。枕を変えるにはまさに「枕が変わる」・「枕を変える」覚悟が必要だったと言えようか。

終わりに

「私は〈20年代〉を現代都市生活の成立した時代と考えている。そして欧米の20年代においては、すべての芸術がジャンルをこえて交流しあっていた。文学、美術、演劇、音楽、建築、映画、風俗などは互いに絡みあっ

ている。したがって、一つのジャンルだけを孤立してあつかなかただけでは、この時代の目まぐるしい状況を充分にとらえることはできない。近代文学史もまた周辺の領域との照応性において書かれなければならない。」「また〈都市〉とか〈風俗〉という、雑多なものを含むものを、丸ごとつかまえるには、やはり〈20年代〉というコンセプトは有効であると思う。政治史、経済史、美術史、文学史といったものが、それぞれ独立して語られているうちは、〈20年代〉はそれほど必要ないだろう。」(海野弘(2023年没)『モダン都市東京—日本の1920年代』1983刊より)

海野氏の持つこの視点は、さらに遡って、少なくとも江戸時代の18世紀以降の研究においては、時代の目まぐるしい状況を充分に捉える、つまり真に時代を研究するためにはや必須・喫緊のものだと考える。しかしながら海野氏の考えが40年過ぎた今に至るも先見性のある考えであり続けている事は決して好ましい事態ではない。ではなぜそういう方向に学問はなかなか進まないのだろうか。多くの時代区分の言葉・多くの学問ジャンル区分の言葉などの専門用語が存在している。それらの「言葉」は、作られ用いられた当初はすべて、複雑極まりない人間の営みを解明しやすくするために、研究者が雇った研究上の道具(使用人・僕)であったはずである。ところが、歳経りてゆくと、言葉は自らの神殿を築いて地を支配する王国を形作り、王国に新しく入ってくる新参の研究者をあたかも使用人・僕の如くにマインドコントロールして自らを崇め奉らせ、国境を崩そうとするものを拒絶し始める。閉鎖性・排他性・言葉の呪縛・固定観念(マインドセット)・硬直化・金科玉条・神聖不可侵・ムラ社会……。一步引いて見ればまさにそう認識される。自らを省みて、身に覚えも心当たりもある研究者は多からう。

「初めに言があった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。」(ヨハネ福音書第1章1-3)

言葉はもともと神そのものであり、言葉によって書かれたものはすべて

神(のもの)であり、言葉は神格化されるものであり、言葉が神の如くに振舞って何の不思議もなく、言葉は容易に研究者を自らの使用人・僕の立場に墮とすと二千年前の英知は見抜いていた。これが福音(良き知らせ)と名付けられたものの冒頭に「言葉」で語られていることに、深く絶望し、真に言葉を失う。

付論「江戸・明治時代の庶民風俗」(補遺)

前稿(『人間文化研究』第49号所載、2022年)に於いて、麦湯店・枇杷葉湯売り・定斎売りを取り上げて考察した。その後に管見した資料をまとめて記しておく。

(麦湯店)

画像例

文化10年(1813)―春好齋北洲『新歌街紅摺 げいこ菊野』、早稲田大学演劇博物館蔵

嘉永3年(1850)―笠亭仙果『犬の草紙』13編上、大阪府立中之島図書館蔵

弘化期―歌川国芳『星月夜糸之調』口絵、福田和彦『国芳』(艶色浮世絵全集10、1997年)98頁図版83

弘化・嘉永期―三代歌川豊国『夜商内六花撰(麦湯売り)』、江戸東京博物館・東京都立中央図書館・文化学園大学図書館蔵

安政4年(1857)―歌川国貞『東都両国大花火眺望』、文化学園大学図書館蔵

文久2年(1862)―二世梅暮里谷峨『どどいつ図会』、大空社編『江戸時代庶民文庫』第68巻(2018年)79頁

明治18年(1885)―岡本昆石編『古今百風 吾妻餘波』一編六葉オモテ

明治期―二代歌川広重『東京開化三十六景一両国之大花火』、東京都立中央図書館蔵

松村春輔『開化一物物語』、東京都立中央図書館蔵

記事

長谷川時雨『旧聞日本橋』流れた唾き(青蛙選書35、1971年)166頁

明治ニュース事典編纂委員会編『明治ニュース事典』1(1983年)604・605・700頁

マール社編集部編『100年前の東京』1(1996年)98・99頁

(枇杷葉湯売り)

画像例

天保12年(1841)—歌川国貞『花菖いろは連歌—東海道沖津船渡し場』, 国立劇場調査養成部資料課編『国立劇場所蔵芝居版画等図録』3(1984年)42・43頁図版50。国立音楽大学付属図書館・早稲田大学演劇博物館蔵

嘉永2年(1849)—狂言堂春のや織月『浪花十二月画譜』, 船越政一郎編『浪速叢書』第14冊(1927年)594・595頁

画像例・記事

昭和8年(1933)—藤田斗南「物売りの声」『上方』第31号13・14頁。日本風俗史学会編『近代日本風俗史』第5巻(1968年)210頁

記事

『重宝記(完)』(明和6年, 1769), 長友千代治編『重宝記資料集成』第27巻(2006年)10・11頁

斎藤月岑『武江年表』天明年間記事, (東洋文庫116『武江年表1』, 1968年)223頁

堀井令以知編『大阪ことば辞典』(1995年)608・609頁

仲田定之助『明治商売往来 続』(ちくま学芸文庫, 2004年)461・467頁

宮田章司『江戸売り声百景』(岩波アクティブ新書74, 2003年)53頁

(定斎売り)

画像例

天保16年(1845)—池田英泉(一筆庵)『教諭謎々 春の雪』, 今中宏編『教諭謎々 春の雪』(大江戸文庫1, 1957年)15頁

明治12年(1879)—岡本起泉『東京奇聞』7編中, 早稲田大学図書館蔵

画像例・記事

宮田章司『江戸売り声百景』(岩波アクティブ新書74, 2003年)52~55頁

広告

明治23年(1890)—上原東一郎編『商人名家東京買物独案内』下, 花咲一男編『諸國買物調方記』244頁

明治39年(1906)—『風俗画報』第36号

明治42・43年(1909・1910)—『風俗画報』第83号

記事

樋田満文『明治東京歳時記』(青蛙選書26, 1968年)338・339頁

仲田定之助『明治商売往来 続』(ちくま学芸文庫, 2004年)460・461頁

注

1. 茶筌

(1) 以下を参照されたい。

西村俊範 2017年「桃山～江戸中期, 庶民のお茶」『人間文化研究』第39号

西村俊範 2018年「江戸時代の喫茶道具」『人間文化研究』第41号

西村俊範 2019年「江戸時代の上茶」『人間文化研究』第43号

西村俊範 2021年「江戸時代の茶店」『人間文化研究』第47号

(2) 寺島良安『和漢三才図会』巻31(正徳3年, 1713), 『和漢三才図会』第5(東洋文庫462, 1986年)211頁

(3) 喜多村筠庭『嬉遊笑覧』巻10(文政2年序, 1819), 『嬉遊笑覧』第4(岩波文庫, 2005年)360・361頁

(4) 西村俊範 2019年「江戸時代の上茶」『人間文化研究』第43号。谷川士清(安永5年没, 1776)も『倭訓栞』の中で「此方にても始には煎茶にも茶筌を用ゐたりとそ。今は然らず。」と述べており, 18世紀後半に急速に進んだ現象であったと思われる。

(5) 注(3)喜多村前掲書巻11, 『嬉遊笑覧』第5(岩波文庫, 2009年)49頁

(6) 「諸国風俗問状答」(文化12・13年頃, 1815・6), 平山敏治郎編『日本庶民生活史料集成』第9巻(1969年)729頁

(7) 漆元元三『振り茶の習俗 続』(2001年)振茶の分布図(表紙裏)。中村羊一郎『栄西が将来した抹茶法の行方』振り茶の記録一覧, 熊倉功夫ほか編『栄西「喫茶養生記」の研究』(2014年)192・193頁

(8) 近松門左衛門『関八州繫馬』(享保9年, 1724), 佐竹昭広ほか編『近松浄瑠璃集下』(新日本古典文学大系92, 1995年)372頁

(9) 黒川道祐『雍州府志』巻7土産門下(貞享3年, 1686), 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書』第10巻(1968年)520頁

(10) 清水五郎左衛門・市村六郎左衛門『京雀跡追』天部(延宝6年, 1678), 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書』第1巻(1967年)281頁

(11) 『諸国萬買物調方記』巻4(元禄5年, 1692), 『未刊文芸資料』第2期6(1952年)13頁

(12) 山東京伝『近世奇跡考』巻4(文化元年, 1804), 山東京伝全集編輯委員会編『山東京伝全集』第20巻(2020年)89頁

(13) 山田桂翁『宝暦現來集』(天保2年, 1831), 森銚三・北川博邦監修『続日本隨筆大成』別巻(近世風俗見聞集6, 1982年)246頁

(14) 喜田川守貞『守貞謾稿』巻27(嘉永6年, 1853), 『近世風俗志』四(岩波文庫, 2001年)285・286頁

(15) 赤井達郎編『茶の湯絵画資料集成』(1992年)79頁図版36。

- (16) 浅草寺では7月10日の欲日(四万六千日)に悪事や災難よけのために観音様に供えたお茶のお下がりを飲んだ。希望者が多く、天保頃からは「お茶湯講」ができるほどだった。この茶筌はその土産用の茶筌だった可能性がある。網野宥俊『浅草寺史談抄』11・緑日談義「四万六千日」(1962年)465頁
- (17) 柳沢里恭『雲萍雜誌』巻2(文化11年, 1814), 日本随筆大成刊行会編『日本随筆大成』第2期第2巻(1928年)693頁
- (18) 老人の朝茶を記す資料として時代が19世紀に下るものに以下のものがある。「文屋古文」名義の「老らくの愚にかへる身のめさまはは、よりのもとりてひらく朝兒」の句に、土瓶と大きめの椀に茶筌が入った図が添えられる。宿屋飯盛『新撰狂歌百人一首』(文化6年, 1809), 江戸狂歌本選集刊行会編『江戸狂歌本選集』第7巻(2000年)346頁
- (19) 尊証親王ほか『空也上人絵詞伝』巻中(天明2年, 1782), 国立国会図書館蔵
- (20) 『枯杭集』巻3(寛文8年, 1668), 朝倉治彦・深沢秋男編『仮名草子集成』第18巻(1996年)104頁。この話は『京華要誌』では、鹿を射殺したのは平定盛とされ、鹿を憐れんでその皮を裘とし、その角を杖頭に挟んで常に身から離さなかったという話になっている。京都市編纂部編『京華要誌』(明治28年, 1895), 新撰京都叢書刊行会編『新撰京都叢書』第3巻(1987年)173頁
- (21) 『入年中重宝記』4(元禄7年, 1694), 長友千代治編『重宝記資料集成』第18巻(2006年)162~168頁
- (22) 古くは彦龍周興(延徳3年, 1491没)の『半陶藁』巻3(鉢叩賛)に記される。日本漢学画像データベース掲載。『伊京集』(室町末期)にも「鉢叩 空也聖人末流也」と記される。国立国会図書館蔵。『日葡辞書』にも「鉢叩き」として記される。土井忠生ほか編訳『邦訳日葡辞書』(1980年)193・194頁
その歌については、以下の文献に詳しい。志田延義『続日本歌謡集成』巻2(1961年)29・30頁
- (23) 浅井了意『京雀』巻5(寛文5年, 1665), 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書』第1巻(1967年)423頁
- (24) 井原西鶴『懷硯』(貞享4年, 1687), 日本名著全集刊行会編『西鶴名作集』上(1929年)920頁
- (25) 高井几董編『続明烏』(安永2年, 1773), 佐竹昭広他編『天明俳諧集』(新日本古典文学大系73, 1998年)165頁
与謝蕪村『茶筌売』大谷篤蔵他校註『蕪村集』文章編(古典俳文学大系12, 1972年)338頁
- (26) 作者不詳『(京都名物)富貴地座位』名物之部, 中野三敏編『江戸名物評判記集成』(1987年)186頁
- (27) 注(20)京都市編纂部前掲書に同じ

- (28) 漆間元三『振茶の習俗』(民俗資料選集12, 1982年)43頁。空也門徒の如電居士が明治25年に記した宗派の紹介文にも、市中勤行の茶筌売りについては一切触れていない。如電居士「空也念仏」・「空也念仏(前号続)」『風俗画報』43・44号(1892年)。五來重氏は、昭和23年に京都市観光課が鉢叩き茶筌売りを昔通りに復興して行ったことがあったとされる。本来のものは戦前までとみてよかろう。五來重「鉢叩」角川書店編『図説俳句大歳時記』冬(1965年)383頁
- (29) 注(15)赤井前掲書80頁図版38。国立歴史民俗博物館蔵
- (30) 注(14)喜田川前掲書巻六、『近世風俗志』一(岩波文庫, 1996年)265・267頁。高橋幹夫『道具で見る江戸時代』(シリーズ「江戸」博物館1, 1998)23頁
- (31) 五來重「東北院念仏会と遊行聖」, 『日本絵巻物全集月報』25(日本絵巻物全集第28巻付録, 1979年)14頁
- (32) 画像例として、以下のものを確認している。
- 〔第1期〕
- 12世紀後半—『年中行事絵巻』巻4(射遣), 角川書店編集部編『日本絵巻物全集』第24(1968年)59頁図版43・122頁。小松茂美編『日本絵巻大成』第8(1977年)21頁(茶筌売り無し)
- 14世紀—『法然上人絵伝』第17巻, 角川書店編集部編『日本絵巻物全集』第13巻(1961年)79頁図版97(茶筌売り無し)
- 14世紀以降—『一遍上人絵伝』巻7, 角川書店編集部編『日本絵巻物全集』第23巻(1968年)58頁図版61(茶筌売り無し)
- 『融通念仏縁起絵巻』禅林寺本・来迎寺本(茶筌売り無し), 東方書院編『日本絵巻全集』第4巻(1929年)6頁第3図の3, 41頁第19図の1
- 『融通念仏縁起絵巻』明德版本(茶筌売り無し), 松原茂『融通念仏縁起絵巻』(日本の美術302, 1991年)30頁第31図
- 15世紀頃—『清凉寺縁起絵巻』, 東方書院編『日本絵巻全集』第1巻(1928年)102頁第26図の6(茶筌売り無し)
- 伝土佐光信画『七十一番職人歌合』下巻49番, 青木国夫ほか編『江戸科学古典叢書』6(1977年)108・109頁。森暢編『日本絵巻物全集』第28巻(1979年)98頁(茶筌売り無し)
- 16世紀—『洛中洛外図屏風』(歴博甲本), 右隻(室町通)・左隻(武者小路通)2か所に見える。国立歴史民俗博物館ホームページ。
- 『洛中洛外図屏風』(上杉本), 右隻(長講堂・六角堂)・左隻(蘆山寺)の3か所に見える。注(15)前掲書80頁図版39。小沢弘『図説 上杉本洛中洛外図屏風を見る』(1994年)90頁

〔第2期〕

- 江戸前期—岩佐又兵衛「職人尽図巻」, 谷川健一編『諸職風俗図絵』(日本庶民生活史料集成第30巻, 1982年)133頁
菱川師宣『職人尽倭画』(安政3年の模写), 国立国会図書館蔵
明暦4年(1658)—中川喜雲『京童』巻4, 野間光辰編『新修京都叢書』第1巻(1967年)55頁
寛文期—『難野郎古たたま』, 歌舞伎評判記研究会編『歌舞伎評判記集成』第1巻(1972年)73頁
延宝2年(1674)—坂内直頼『山城国四季物語』巻6, 『近世文学資料類従古板地誌編』5(1981年)216頁(茶筌売り無し)
延宝5年(1677)—浅井了意『出来齋京土産』巻1, 『近世文学資料類従古版地誌編』6(1976年)63頁
延宝6年(1678)—大久保急鑑・秀興『奈良名所八重桜』五葉オモテ, 中村幸彦編『新編稀書複製会叢書』第31(1990年)173頁
天和4年(1684)—菱川師宣『侍農絵づくし』16葉オモテ, 東洋文庫・日本古典文学会編『菱川師宣絵本』(岩崎文庫貴重本叢刊〈近世編〉第5巻, 1974年)77頁
元禄3年(1690)—蒔絵師源三郎『人倫訓蒙図彙』巻7, 谷川健一編『諸職風俗図絵』(日本庶民生活史料集成第30巻, 1982年)432頁
元禄9年(1696)—『人倫重宝記』巻5, 長友千代治編『重宝記資料集成』第5巻(2006年)495頁

〔第3期〕

- 元禄中期(元禄11年まで)—英一蝶『風俗画絵鑑』鉢叩き画賛, 小林忠『英一蝶』(日本の美術260, 1988年)40頁第34図。板橋区立美術館カタログ『英一蝶展』(1984年)44頁(茶筌売り無し)
元禄13年(1700)—『役者万年暦(京)』, 歌舞伎評判記研究会編『歌舞伎評判記集成』第2巻(1973年)502頁
宝永元年(1704)—金谷平右衛門編『宝永都名所図会』巻12(極楽寺), 野間光辰編『新修京都叢書』第8巻(1968年)256・257頁
宝永3年(1706)—森川許六編『風俗文選』巻2鉢叩辞(向井去来), 馬場錦江『校註風俗文選通釈』(1944年)69頁
延享4年(1747)—彭城百川『十二か月俳画押絵貼屏風』十一月, 名古屋国立博物館カタログ『大雅と蕪村』(2021年)29頁(茶筌売り無し)
寛延3年(1750)—『惟高惟仁 くらゐ諍い』, 東京都中央図書館加賀文庫蔵
江戸中期—鳥居清満画『市川雷蔵・中村松江』, Art Institute of Chicago蔵

磯田湖龍齋画『茶筌売図』, 東京国立博物館蔵

明和4年(1767)―無款(鳥居清満)『絵看板 鶴重藤咲分勇者』, 辻惟雄監修『ボストン美術館肉筆浮世絵』第2巻(2000年)図版97

明和期―鳥居清経画『鶴森一陽的』, 東京都中央図書館加賀文庫蔵

明和・安永期―与謝蕪村『鉢たたき図』, 丸山一彦ほか校註『蕪村全集』第6巻(1998年)389頁図版14

与謝蕪村『花に表太図』, 丸山一彦ほか校註『蕪村全集』第6巻(1998年)407頁図版60

北尾雪坑齋画『教訓以呂波経』, 大空社編『絵図集成 近世子どもの世界 絵図編』第7巻(1995年)155頁

安永5年(1776)―与謝蕪村『鉢叩き図(「西念は」句白画賛)』, 柿衛文庫カタログ『俳画のたのしみ』(2015年)40頁

安永6年(1777)―四穂園麦里撰『狂歌除元集』, 近世上方狂歌研究会編『近世上方狂歌叢書』第13(1990年)90頁

安永7年(1778)―英一蝶『群蝶画英』初編14葉オモテ, 早稲田大学図書館蔵

安永期―円山応挙『華洛四季遊戯図巻』, 赤井達郎編『茶の湯絵画資料集成』(1992年)79頁図版37

天明2年(1782)―尊証親王ほか『空也上人絵詞伝』巻中, 国立国会図書館蔵

天明6年(1786)―秋里離島『都名所図会』巻1, 国立国会図書館蔵

天明・寛政期―馬来ほか『俳諧一枚摺物』, 『俳諧摺物図譜』(日本書誌学大系66, 1992年)204頁図版381―1

寛政元年(1789)―中村惕斎『増補頭書訓蒙図彙大成』, 大空社『江戸時代女性文庫』27(1995年)

寛政9年(1797)―五升庵瓦全『職人尽発句合』地, 東京大学総合図書館蔵
文化3・4年(1806・7)―十辺舎一九『金草鞋』西国順礼編9, 早稲田大学図書館蔵

文化4年(1807)―十返舎一九『馬士の歌囊』, 東京大学図書館霞亭文庫蔵

文化5年(1808)―十返舎一九『東海道中膝栗毛』巻七下, 麻生磯次校註『東海道中膝栗毛』(日本古典文学大系62, 1958年)414頁

文化13年(1816)―葛飾北斎『三体画譜』, 芸艸堂『北斎絵手本集成』3(2020年)18頁

文政6年(1823)―葛飾北斎『今様櫛箆雛形』, 芸艸堂『北斎絵手本集成』6(2022年)200頁

文政9年(1826)―墨川亭雪麿『ちゃせんうり話の種瓢』上册扉絵・下册四之巻, 国立国会図書館・早稲田大学図書館蔵

- 川原慶賀『人物画帳』, 小林淳一編『江戸時代人物画帳』(2016年)152頁図版71
- 文政13年(1830)一『尚古造紙挿』下巻, 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第1期巻2(1975年)463頁
- 文政期一柳川重信画『柳川画譜』, 江戸東京博物館蔵
- 文政・天保期一渡辺崋山『俳画(茶筌売り)』, 佐々木丞平・正子編『古画総覧—文人画系1』(2006年)93頁図版4334
- 天保9年(1838)一墨川亭雪麿『人形手新図更紗』第6巻, 国立国会図書館蔵
- 天保期か—柳斎重春画『浪花嶋之内称里もの いずや みよ 鉢叩き』, 久保惣記念美術館編『久保恒彦父子コレクション 第2期 浮世絵版画上方絵編』(2009年)図版120-7
- 弘化4年(1847)一『日本二千年袖鑑拾遺絵入』地, 大空社編『江戸時代庶民文庫』第40巻(2015年)74頁
- 嘉永2年(1849)一狂言堂春のや織月『浪花十二月画譜』, 船越政一郎編『浪速叢書』第14巻610頁
- 弘化・嘉永期—歌川広重『東海道五十三次』大尾・京(隸書版), 阿部出版編『歌川広重東海道五十三次五種競演』(2017年)338頁
横山清暉『茶筌売』, 佐々木丞平・正子編『古画総覧—円山四条派4』(2003年)879頁図版3604(留守模様)
- 嘉永期—歌川広重『京洛雪中往来図』, 『肉筆浮世絵大観』第5(1996年)図版32
- 安政2年(1855)一歌川広重『五十三次名所図会』(豎絵)京・三条大はし, 阿部出版編『歌川広重東海道五十三次五種競演』(2017年)339頁, 歌川広重『国尽張交図会』, 国立国会図書館蔵
- 文久4年(1864)一二代柳亭種彦『童謡妙々車』17篇下, 早稲田大学図書館蔵
- 慶応2年(1866)一仮名書魯文『東紫哇文庫』3篇上表紙, 国立国会図書館蔵
- 幕末期—西山芳園『茶筌売』, 佐々木丞平・正子編『古画総覧—円山四条派6』(2005年)380頁図版1477
中島来章『茶筌売』, 佐々木丞平・正子編『古画総覧—円山四条派6』(2005年)592頁図版2390
中島来章『鉢叩き』, 佐々木丞平・正子編『古画総覧—円山四条派6』(2005年)771頁図版3143(茶筌売り無し)
柴田是真『鉢たたき』, 佐々木丞平・正子編『古画総覧—円山四条派4』(2003年)1135頁図版4688, 1141頁4714(留守模様), 1143

- 頁4724。佐々木丞平・正子編『古画総覧一円山四条派5』(2004年)17頁図版68
- 幕末・明治期一森寛斎『茶筌売』, 佐々木丞平・正子編『古画総覧一円山四条派2』(2000年)439頁図版1932.1
- 明治初期一松川半山『半山画譜』中巻, 小泉吉永解題『江戸時代庶民文庫』第100巻(2021年)276頁
- (33) 山岡元隣『宝蔵』(寛文11年, 1671), 小高敏郎ほか校註『貞門俳諧集』(二)(古典俳文学大系2, 1971年)37頁
- (34) 注(2)寺島前掲書に同じ
- (35) 京都では町屋が正月に大服茶を青竹茶筌で点てる風習があったことが、茶筌売りが大晦日頃のみに残りえた理由かと思われる。注(28)五來前掲文献

2. びいどろ(ガラス)鏡

- (36) 土井忠生ほか編訳『邦訳日葡辞書』(1980年)56頁
- (37) 岩瀬百樹(山東京山)『歴世女装考』(弘化4年, 1847), 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第1期第6巻(1975年)175頁
- (38) 奥平俊六・関口敦仁監修『デジタル洛中洛外図屏風 [島根県美本]』(2009年)14頁
- (39) 井原西鶴『好色五人女』(貞享3年, 1686)巻3, 麻生幾次ほか校註「西鶴集上」(日本古典文学大系47, 1957年)275頁
- (40) 山東京伝『一刻働万両回春』(寛政10年序, 1798), 山東京伝全集編輯委員会編『山東京伝全集』第4巻(2004年)195頁
- 同様の例に以下のものがある。
- 市場通笑『間違日夜鍋』(天明元年, 1781), 国会図書館・東京都中央図書館加賀文庫蔵
- 芝全交『親の敵現夢也』(寛政元年, 1789), 国立国会図書館蔵
- 十辺舎一九『心学芋蛸汁』(寛政12年, 1800), 東京都中央図書館加賀文庫蔵
- 聞天舎声『下界たわけ鼻落天狗』(享和元年, 1801), 東京都中央図書館加賀文庫蔵
- 十辺舎一九『初宝鬼島台』(享和3年, 1803), 国会図書館・東京都中央図書館加賀文庫蔵
- (41) 管見した画像例を列挙する。
- 貞享4年(1687)一奥田松伯軒『女用訓蒙図彙』1(鏡・鏡架), 大空社編『江戸時代女性文庫』97(1998年)
- 享保期一西川祐信『西川美人絵尽』, 国立国会図書館蔵
- 享保～宝暦期一奥村政信『くち紅』, 久保田米斎『江戸風俗浮世絵大鑑』

第2輯(1917年)

- 安永7年(1778)―鳥居清長画『化物箱根先』上巻表紙, 棚橋正博『黄表紙
総覧 図録編』(2004年)73頁
- 天明元年(1781)―伊庭可笑『古呂利山榭味噌』下巻, 東京都中央図書館加
賀文庫蔵
- 文化期―歌川国貞『江戸十二鐘―増上寺』, 鈴木重三編『秘蔵 浮世絵』
2(1978年)図版16
- 文政2年(1819)―並木正三『当世化粧容顔美艶考』乾の部, 大空社編『江
戸時代女性文庫』第18巻(1994年)
- 文政4年(1821)―歌川国貞『浮世名異女図会』浪花嶋の内 中指, 日本浮
世絵協会編『原色大百科事典』第5巻(1980年)107頁図版437
歌川国貞『浮世名異女図会』東都 二丁町風, 『風俗画報』132号
(1897年)12・13頁の間
- 文政5・6年(1822・23)―溪斎英泉『今様美人拾二景 東叡山寛永寺 う
れしそう』, ポーラ文化研究所編『浮世絵美人くらべ』(ポーラ文
化研究所コレクション5, 1998年)
- 文政期―太田記念美術館カタログ『菊川英山』(2017年)28頁図版11
- 嘉永元年(1848)―歌川広重『江戸名所五性』, 三谷一馬『江戸年中行事図
聚』(1998年)彩色図版2・198頁
- 安政2年(1855)―二代為永春水『北雪美談時代加々見』初編下表紙, 早稲
田大学図書館蔵
- 安政4年(1857)―三代豊国『江戸名所百人美女 あすかやま』, ポーラ文
化研究所編『浮世絵美人くらべ』(ポーラ文化研究所コレクシ
ョン5, 1998年)
- 万延元年(1860)―朧月亭有人『春色恋染分解』初編巻上扉絵, 早稲田大学
図書館蔵
- 明治4年(1871)―豊原国周『当世見立 十六むさし 柳はしおこん』,
ポーラ文化研究所編『浮世絵美人くらべ』(ポーラ文化研究所コ
レクション5, 1998年)
- また, 鼻紙(鏡)袋の中に入れるようになった例も見られる。この袋は「三
徳」と呼ばれる。喜田川守貞『守貞鋟稿』巻20(嘉永6年, 1853), 『近世風
俗志』3(岩波文庫, 1999年)235・236頁。高橋幹夫『江戸いろざと図譜』
(1997年)42頁
- 文政5年(1822)―歌川国貞『衿をあわせる女』, 日本浮世絵協会編『原色
大百科事典』第5巻(1980年)107頁図版438
- 化政期―歌川国貞『浮世名畢女図会』東都式丁町風, 風俗画報132号(明治
30年, 1897)

- 溪斎英泉『美艶仙女香』, ポーラ文化研究所編『浮世絵美人くらべ』(ポーラ文化研究所コレクション5, 1998年)
- 溪斎英泉『万寿嘉々見』, 林美一『枕絵』(1970年)147頁
- 溪斎英泉『かげま』, 大鳳閣書房編『浮世絵大家集成』第16巻(1931年)溪斎英泉図版24
- 天保14年(1843)一柳亭種彦『偽紫田舎源氏』11編下, 早稲田大学図書館蔵
- 大正9年(1920)一樋口五葉『紅つけ』, ポーラ文化研究所編『浮世絵美人くらべ』(ポーラ文化研究所コレクション5, 1998年)39頁図版2。
- 平木浮世絵財団編『平木浮世絵コレクション大全』(2021年)図版352
- 大正期一ポーラ文化研究所編『浮世絵美人くらべ』(ポーラ文化研究所コレクション5, 1998年)105頁図版6
- (42) 吉田半兵衛『好色訓蒙図彙』第3冊(貞享3年, 1686), 国際日本文化研究センター蔵。文学作品でもそのように用いる例が認められる。井原西鶴『好色二代男(諸艶大鑑)』巻5・5(貞享元年, 1684), 佐竹昭広ほか校註『新日本古典文学大系』76(1991年)164頁
- (43) 『室町殿日記』(慶長中頃, 1600年過ぎ)撞鐘わる事, 佐竹昭広編『室町殿日記』下(京都大学国語国文資料叢書17, 1980年)282頁
- (44) 近松門左衛門『孕常盤』4幕目(宝永頃, ~1710~), 岩垣健之助編『孕常盤』(明治25年)51頁
- (45) 管見した画像例を列举する。
- 天和3年(1683)一井原西鶴『難波の兒は伊勢の白粉』巻2, 穎原退蔵ほか編『定本西鶴全集』第9巻(1951年)32頁。歌舞伎評判記研究会編『歌舞伎評判記集成』第1巻(1972年)159頁
- 17世紀一菱川師宣『和合同塵』, 大鳳閣書房編『浮世絵大家集成』続第6巻(1934年)図版12
- 宝永2年(1705)一津打久平次『早咲隅田川』第2, 高野辰之校訂『元禄歌舞伎傑作集』上巻(1925年)709頁
- 正徳6年(1716)一西川祐信『雛形都風俗』, 国立国会図書館蔵
- 享保3年(1718)一西川祐信『西川雛形』, 大鳳閣書房編『浮世絵大家集成』第4巻(1932年)西川祐信図版20
- 享保19年(1734)一西川祐信『絵本清水の池』, 大空社編『江戸時代庶民文庫』第47冊(2015年)26頁
- 享保21年(1736)一西川祐信『絵本つたかつら』, 国立国会図書館蔵
- 享保頃一奥村利信『二代三条勘太郎の八百屋お七』, 後藤茂樹『浮世絵大系』第1巻(1974年)105頁図118
- 西川祐信『西川美人絵尽』, 国立国会図書館蔵

- 天明6年(1786)―万象亭『景清塔の暎』, 国立国会図書館・東京都中央図書館加賀文庫蔵
- 寛政7年(1795)―市場通笑『桃食三人子宝噺』, 国立国会図書館蔵
- 文化14年(1817)―東里山人『物見松女熊坂』後編下, 国立国会図書館蔵
- 文政期―太田記念美術館カタログ『菊川英山』(2017年)127頁図版154
- (46) 中野政樹『和鏡』(日本の美術42, 1969年)72頁。久保智康『中世・近世の鏡』(日本の美術394, 1999年)71頁。初代烏亭焉馬『青楼育咄雀』(寛政5年, 1793)・山東京伝『三歳図会稚講釈』(寛政9年, 1797)で鏡研ぎ師が研いでいる鏡は顔の大きさと対比から見ても格段に大きくなっている。共に東京都立中央図書館加賀文庫蔵
- (47) 永積洋子『唐船輸出入品数量一覽1637~1833年』(1987年)
- (48) 岡本文一『日本近世・近代のガラス論考』第1章・近世初期のガラスをめぐって(2020年)58・59頁。ガラス鏡は幕末迄びいどろ鏡と呼ばれた。「硝子(びいどろ)鏡の薄片を掌に当て、日の光に向て耀かす可し」。福沢諭吉抄訳『兵士懐中便覧』相図の事(慶応4年, 1868), 『福沢諭吉全集』第2巻(1959年)219頁
- (49) 大岡清相『崎陽群談』第九(享保元年, 1716), 中田易直校訂『崎陽群談』(1974年)177頁
- (50) 例えば、西川祐信『絵本西川東童』中巻(延享3年, 1746)では、夏の大川端の橋(両国橋)のたもとの飯店で、中空びいどろ容器の中に鮒を入れて子供向けに販売している絵がある。上笹一郎『日本〈子どもの歴史〉叢書』第7巻(1997年)51頁
- (51) 柴田実編『泉佐野市史』第5章・封建社会の繁栄(1958年)274・275頁。先田与助『日本ガラス鏡工業百年史』(1971年)9頁。川添利男『長崎びいどろ』(1977年)149・150頁。岸和田市史編纂委員会編『岸和田市史』第4巻第3節商工業の発展(2005年)157頁
- (52) 志賀理斎は「硝子を切るには火打石の角にて摺切るべし。また、硝子に水銀を引くには、硝子の上に生の棗の汁を付るなり。其上に水かねを引けば自由に付くものなりとぞ。」と記す。志賀理斎『理斎随筆』(文政6年, 1823), 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第3期第1巻(1976年)253頁。三谷一馬『江戸見世屋図聚』(2003年)369頁
- (53) 廓霍堂楽水『交替盤栄記』(宝暦4年, 1754), 洒落本大成編輯委員会編『洒落本大成』第2巻(1978年)42頁。三田村鳶魚『びいどろ昔譚』, 『江戸の生活と風俗』(鳶魚江戸文庫23, 1998年)302・303頁
- (54) 山田珠樹訳注『ツンベルグ日本紀行』第25章(1928年)451頁
- (55) 棚橋淳二「近世日本におけるガラス製造法の発展とその限界(3)」(1968年)72・73頁, 棚橋淳二『近世近代日本ガラス史論文選集』第1巻(2006年)

72・73頁

- 司馬江漢『西遊日記』天明8・9年(1788・89), 与謝野寛ほか編『西遊日記』(日本古典全集第2回, 1927年)64・109・186頁
- (56) 注37岩瀬前掲書, 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第1期第6巻(1975年)170頁
- (57) 飛田琴太『通世界二代浦島』下巻(天明4年, 1784), 国立国会図書館蔵
以下, 管見した画像例を列举しておく。
天明8年(1788)一蘭徳(勝川春童)『唐倭傘之濫觴』上巻, 国会図書館・東京都中央図書館加賀文庫蔵
天明期一勝川春朗『風流男達八景 文七の落雁』, 日本浮世絵協会編『原色浮世絵大百科事典』第5巻(1980年)96頁図版381
寛政7年(1795)一喜多川歌麿『名所腰掛八景(平野屋おせよ)』, 『浮世絵聚花』第7巻(1979年)147頁図版133
寛政12年(1800)一沈酔中美明『金世界揃能艶』, 国立国会図書館蔵
享和期一喜多川歌麿『よるもさはるもおまへのうわさをきひてつらさはますかゝみ』, メトロポリタン美術館蔵
喜多川歌麿『夏姿美人図』, 浅野秀剛『浮世絵を読む』2(1998年)32頁図版34
文化5年(1808)一窪俊満『見立て七福神』, 浮世絵データベース
文化8年(1811)一竹塚東子『茶釜前杓子物語』, 林美一『江戸看板図譜』(1997年)第815図(模写), 専修大学図書館蔵
文化9年(1812)一長亭五蘭『丁子車引手妻音』, 国立国会図書館・大阪大学附属図書館蔵
文政期一歌川国貞『近江八景・八橋』, ボストン美術館蔵
化政期一歌川国貞『当世俳優最良競』, 大鳳閣書房編『浮世絵大家集成』第17巻(1931年)図版4
嘉永3年(1850)一山東京山『大晦日曙草紙』15編上並20編上, 早稲田大学図書館蔵
元治元年(1864)一光盛舎作丸『女大学絵抄』, 石川松太郎監修『女大学資料集成』第3巻(2003年)338頁
明治2年(1869)一豊原国周『当勢三十二想』はつかし想, ポーラ文化研究所編『浮世絵美人くらべ』(ポーラ文化研究所コレクション5, 1998年)65頁
明治9年(1876)一平田繁図解『小学入門図解』単語第五図略解説, 東京学芸大学付属図書館蔵
明治10年(1877)一『通常物問答図解』, 東京学芸大学附属図書館蔵
明治15年(1882)一垣貫一右衛門編『商工技芸浪華の魁』, ゆまに書房『絵

で見る明治商工便覧』第6巻(1987年)28頁

- (58) 注(57)明治15年の項目参照
(59) 注(51)柴田前掲書275頁
(60) 山東京伝『指面草』(天明6年, 1786), 古谷知新編『滑稽文学全集』第6巻(1919年)120頁

以後の用例を記す。

天明9年(1789)―振鷺亭『自惚鏡』序, 国立国会図書館蔵

寛政3年(1791)―『仕懸文庫』, 佐竹昭広ほか編『新日本古典文学大系』第85巻(1990年)144頁

天保2年(1831)―一曲山人『仮名文章娘節用』前編第2回, 春陽堂『仮名文章娘節用』前編第2回(明治15年)36頁

天保3年(1832)―寺門静軒『江戸繁昌記』2篇(笥頭舗), 『江戸繁昌記』2(東洋文庫276, 1974年)54・55頁

万延元年(1860)―河竹黙阿弥『三人吉三白浪』序幕, 『評釈江戸文学叢書』第6巻(1936年)700頁

- (61) 注(14)喜田川前掲書後集巻2, 『近世風俗志』五(岩波文庫, 2002年)191・205頁

ちなみに, 安売り屋(十九文屋)でも売られていた。

三文舎自楽『仮名文章娘節用』前編第2回(天保2年, 1831), 国民文庫刊行会編『昔話稲妻表紙・今朝酔菩提』(1910年)575頁。注(57)文化8年の項参照

- (62) 管見した例を挙げる。

寛政5年(1793)―常盤真辻『糸瓜皮歌袋』, 東京都中央図書館加賀文庫蔵
享和2年(1802)―千穂庵三陀羅『風流百人一首五十鈴川狂歌車』綴元安, 国立国会図書館・東京都立中央図書館蔵

文化8年(1811)―山東京山『奴勝山愛玉丹前』, 高木元編『山東京山伝奇小説集』(江戸怪異綺想文芸大系4, 2003年)422・423頁

文化頃―勝川春亭『小野小町』, メトロポリタン美術館蔵

文政4年(1821)―十返舎一九『高師直実伝―小夜衣』, 九州大学図書館蔵

文政12年(1829)―西来居未仏『忠臣合鏡』前編, 早稲田大学図書館蔵

文政13年(1830)―柳亭種彦『偽紫田舎源氏』3編下表紙, 棚橋正博・村田裕司編『絵で読む江戸のくらし大事典』(2004年)巻頭口絵

天保5年(1834)―柳亭種彦『偽紫田舎源氏』第11編上, 国立国会図書館・早稲田大学図書館蔵

天保6年(1835)―同上第21編上

二代十返舎一九『三国太郎再来伝』, 国立国会図書館蔵

天保9年(1838)―長谷川貞信『仮名手本忠臣蔵 高師直』, 阪急学園池田

- 文庫編『上方役者絵集成』第3巻(2001年)13頁図版14
- 弘化元年(1844)一歌川国芳『名高百勇伝一鞆絵女』、浮世絵データベース
- 弘化3年(1846)一万亭応賀『釈迦八相倭文庫』第2編下、早稲田大学図書館・大阪府立中之島図書館蔵
- 弘化4年(1847)一柳亭種彦『其由縁鄙佛』2編上、国立国会図書館・早稲田大学図書館・東京都中央図書館加賀文庫蔵
- 嘉永2年(1849)一笠亭仙果『犬の草紙』4編、大阪府立中之島図書館蔵
万亭応賀『釈迦八相倭文庫』12編下、早稲田大学図書館蔵
一筆庵可候『歌枕二世譚』初編上册、国立国会図書館蔵
- 嘉永3年(1850)一万亭応賀『釈迦八相倭文庫』14編上、早稲田大学図書館蔵
- 嘉永5年(1852)一柳亭種彦『其由縁鄙佛』七編上、早稲田大学図書館・東京都中央図書館加賀文庫蔵
- 嘉永6年(1853)一柳亭種彦『其由縁鄙佛』十編上、早稲田大学図書館・東京都中央図書館加賀文庫蔵
- 安政4年(1857)一仮名書魯文『男達吾孀花川戸』中巻、国立国会図書館蔵
二代為永春水『北雪美談時代加々見』8編下表紙、早稲田大学図書館蔵
- 安政5年(1858)一三代歌川豊国『源氏後祭余情』第3巻、東京都立中央図書館蔵
- 安政5・6年頃(1858・9)一柳煙亭種清『風俗浅間嶽』7編表紙、早稲田大学図書館蔵
- 安政7年(1860)一柳亭種彦『其由縁鄙佛』17編上、早稲田大学図書館・東京都中央図書館加賀文庫蔵
- 文久2年(1862)一柳下亭種員『白縫譚』第36編下冊、佐藤至子編『白縫譚』中(2006年)161頁
落合芳幾『当御代花の姿見』、たばこと塩の博物館カタログ『浮世絵版画編』第2部(2011年)252頁《芳幾78》
- 文久3年(1863)一二代柳亭種彦『白縫譚』中、佐藤至子編『白縫譚』中(2006年)217頁
- 元治元年(1864)一二代歌川国貞『俳優楽屋の姿見 書出し役部屋』、国立劇場調査養成部資料課編『国立劇場所蔵芝居版画等図録』7(1994年)122頁図版126
- 慶応元年(1865)一豊原国周『花盛楽屋姿見(河原崎権十郎)』、早稲田大学演劇博物館蔵
- 慶応2年(1866)一二代柳亭種彦『白縫譚』51編上、佐藤至子編『白縫譚』中(2006年)530頁

- 二代為永春水『新局九尾伝』3編上, 早稲田大学図書館蔵
 江戸末期—歌川国貞『無題(源氏絵風)』, 早稲田大学図書館蔵
 歌川派『座敷狂言の仕度』, 小林忠編『肉筆浮世絵大観』第10巻
 (1995年)147頁
 歌川国貞『楽屋姿見—市川門之助』, 東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録 浮世絵版画篇』下(1974年)図版2708
- (63) 例えば注(62)文政12年並びに安政4年『北雪美談時代加々見』の項目参照。
 共に子供が捧げ持っている。なお、青銅鏡の姿見で管見した最大のものは、
 49.8cm × 34.2cmである。鎌倉歴史文化交流館カタログ『和鏡』(2019年)
 67頁第88図
- (64) 注(62)嘉永3年の項目参照
- (65) 柳亭種彦『偽紫田舎源氏第16編下(天保5年, 1834)』, 国立国会図書館・早稲田大学図書館蔵。他に明治期の例がある。歌川芳虎『源氏絵・邸内遊楽図』(明治2年, 1869) , 神戸市立博物館カタログ『和ガラスの神髄』(2011年)95頁参考図版8
- (66) 棚橋淳二「日本のガラス(引札2)」『セラミックス』1972年4月号267・268頁。岡田譲『ガラス』(日本の美術37, 1969年)81頁第108図。『商業小学取引要文』に見える柄に簾を巻いた鏡もこのようなガラス鏡であっておかしくない。田島象二編『商業小学取引要文』(明治8年)25裏
- (67) 注(51)川添前掲書222頁
- (68) 『第五単語図』(明治9年) , 『江戸・幕末・明治, おもちゃ絵・遊び絵の世界』(2018年)81頁
- (69) 東京学芸大学教育コンテンツアーカイブス
- (70) 上原東一郎編『商人名家東京買物独案内』(明治23年)101葉ウラ
- (71) 岡本昆石『昆石雑録合載袋』(明治30年, 1897) , 鈴木棠三篇『江戸・東京風俗史料』上巻(1991年)158・159頁
- (72) 「鏡磨并に箕売り」『風俗画報』223号(明治33年)
- (73) 注(51)先田前掲書9頁
- (74) 橋爪貫一『続世界商売往来』(明治5年序, 1872) , 早稲田大学図書館・東京学芸大学蔵
- (75) 『大阪朝日新聞』明治32年11月21日朝刊, 朝日新聞データベース。菊池真一編『明治大阪物売図彙』(上方文庫17, 1998年)84頁
- (76) 『画探新題』三篇(京都刊, 明治22年) , 公文教育研究会子ども文化史料閲覧データベース
 尾形月耕「新撰百工図」『風俗画報』第18号(明治23年7月1日, 1890) ,
 槌田満夫編『江戸東京職業図典』2003年)85頁
 松村伯爵円『浪花嵐東男』(明治24年) , 国立国会図書館蔵

(77) 注(70)上原前掲書69葉ウラ

3. 文机

- (78) 未達『普茶料理抄』(明和9年, 1772), 原田信男『江戸の料理と食生活』(2004年)153頁
- (79) 在転『絵のあした』(宝暦11年, 1761)28葉オモテ, 雲英末雄『江戸書物の世界』(2010年)344頁
 観水堂丈阿『草の枕』上冊(宝暦11年, 1761), 国立国会図書館蔵
- (80) 『源氏十帖物ぐさ太郎』(芝居番付, 明和4年, 1767), 『曾我忠臣蔵錦絵并番付集』所収, 国立国会図書館蔵
- (81) 月岡雪鼎『女貞訓下所文庫』(明和5年, 1768), 国際日本文化研究センター蔵
 鳥居清経画『娘独婚八人』中(明和5年, 1768), 貴重本刊行会編『草双紙』(岩崎文庫貴重本叢刊〈近世編〉第6巻, 1974年)126頁
- (82) 太田南畝『吉原細見 里のをだ巻評』(『風来六々部集』後編上所収, 安永3年, 1774), 古谷知新編『滑稽文学全集』第12巻(1918年)364頁
 恋川春町『芋太郎屁日語咄』(安永7年, 1778), 東京都立中央図書館加賀文庫蔵
 恋川春町『金銀先生再寐夢』(安永8年, 1779), 国立国会図書館蔵
 時雨庵主人『風流仙婦伝』, 東京都中央図書館加賀文庫蔵
 南陀伽紫蘭『玉菊燈籠弁』(安永9年, 1780), 日本浮世絵協会編『原色浮世絵大百科事典』第7巻(1980年)41頁図版101
 山東京伝『焼餅噺』上巻(安永9年, 1780), 山東京伝全集編輯委員会編『山東京伝全集』第1巻(1992年)57頁
- (83) 四方赤良序『万の宝』所収「傾城の学問」(安永9年, 1780), 武藤禎夫編『噺本大系』第11巻(1979)251頁。『絵賛常の山』4編(寛政5年, 1793)では、孔雀の羽を飾った師の文机の前で書物を読む子供の絵に付けて「孔雀尾を画たるに みか、ねと是は孔雀のをのつから玉とみとりにひかりか、やく」と詠む。天賦の才の象徴のように見なしている。西島孜哉編『近世上方狂歌叢書』第28冊(2001年)78頁
- (84) 五代歌川国政『しん板おざしきどうぐ』(明治14年, 1881), 千葉市立美術館カタログ『青木コレクションによる幕末明治の浮世絵』(2005年)120頁図版129
- (85) 竹原春潮斎『風流姫かすみ』第3冊(宝暦12年, 1762), 国際日本文化研究センター蔵
 磯田湖龍斎『風流略源氏 常夏』(明和7~9, 1770~72), ボストン美術館蔵

- 磯田湖龍齋『浮世風俗八景 俳者落雁』(安永4・5年, 1775・6), ポストン美術館蔵
- (86) 豊島治左衛門『江戸かがみ・江戸名物鹿子』(享保18年, 1733), 国立国会図書館蔵
 伊庭可笑『名高江戸紫』(天明2年, 1782), 国会図書館・東京都中央図書館加賀文庫蔵
 八文舎自笑『役者兎の手柄』京の巻(天明3年, 1783), 役者評判記刊行会編『歌舞伎評判記集成』第3期第4巻(2021年)260頁
 桜川杜芳『跡目論嘘実録』上(天明4年, 1784), 国立国会図書館・東京都中央図書館加賀文庫蔵
 八文舎自笑『役者古書始』京の巻(天明7年, 1787), 役者評判記刊行会編『歌舞伎評判記集成』第3期第6巻(2023年)68頁
 北尾重政画『絵本花異葉』(天明8年, 1788), 国立国会図書館蔵
 抽斗のつく唐机も1例だけ確認している。山東京伝『廓中丁子』(天明4年, 1784), 国立国会図書館・大阪大学附属図書館蔵
- (87) 井原西鶴『西鶴織留』巻五(元禄7年, 1694), 野間光辰校註『西鶴集』下(日本古典文学大系48, 1960年)421頁
- (88) 松月堂立羽不角『好色染下地』巻2(元禄4年, 1691), 東洋文庫・日本古典文学会編『浮世草子2』(岩崎文庫貴重本叢刊〈近世編〉第4巻)426頁
- (89) 奥田松柏軒『女蒙求艶詞』(享保14年, 1729)より「呉服見世図解」, 大空社編『江戸時代女性文庫』第97冊(1998)
 類例に以下のものがある。
 市場通笑『津以曾無弟甚六』(安永9年, 1780), 国会図書館・東京都中央図書館加賀文庫蔵
 市場通笑『家伝寿命薬』上巻(天明2年, 1782), 国立国会図書館蔵
 山東京伝『小人国〔コゴメ〕桜』(寛政5年, 1793), 山東京伝全集編集委員会編『山東京伝全集』第3巻(2001年)247頁
 山東京伝『眉間尺三人生醉』上(寛政6年序, 1794), 山東京伝全集編輯委員会編『山東京伝全集』第3巻(2001年)491頁
- (90) 帳箱自体も明治期まで使用され続ける。樋口弘編『幕末明治の浮世絵集成』(1962年)図版346(度量衡の絵解き一金貨, 銀貨, 銅貨の絵解き)。具体的に帳場机の姿を確認できるのは管見の限り明治期以降の民俗資料のみである。川村善之『日本民具の造形』(2004年)156頁
- (91) 『第一単語図』(明治7年, 1874), 小西四郎『錦絵幕末・明治の歴史』第6巻(1977年)69頁
- (92) 文部省検定『新按小学画手本』第1編(明治29年, 1896)第12図, 東京学芸大学教育コンテンツアーカイブ(明治期教科書)

- (93) 唐机の新しい例としては以下のものがある。三代歌川国貞画『露国征伐
戦勝笑話 退将の人相』(明治37・38年, 1904・05), 慶応義塾大学メディア
センター(ボン浮世絵コレクション)蔵

4. 枕

- (94) 栄西『喫茶養生記』桑木枕法(承元5年, 1211), 熊倉功夫他編『栄西『喫
茶養生記』の研究』(2014年)280頁

- (95) 土井忠生ほか編『邦訳日葡辞書』(1980年)377頁

- (96) 「箱枕」の用例

言水撰『俳諧東日記』(延宝9年, 1681), 飯田正一ほか校註『談林俳諧
集』(一)(古典俳文学大系3, 1971年)588頁。日本俳書大系刊行会編『談林
俳諧集』(日本俳書大系第7巻, 1926年)212頁

近松門左衛門『丹波与作待夜のこむろぶし』(宝永4年, 1707), 鳥越文蔵
ほか校註『近松門左衛門集1』(新編日本古典文学全集74, 1997年)387頁

「木枕」の用例

『枕物狂』(江戸前期編), 古川久校註『狂言集』下(日本古典全書, 1956
年)93頁

井原西鶴『西鶴置土産』巻1・2(貞享5年, 1668), 谷脇理史ほか校註
『西鶴集3』(新編日本古典文学全集68, 1996年)495頁

井原西鶴『好色一代男』巻一, 巻五(天和2年, 1682), 麻生磯次ほか校註
『西鶴集』上(日本古典文学大系47, 1957年)56・148頁

玄梅撰『鳥の道』(元禄8年序, 1695), 安東次男『木枕の垢』(1981年)34
頁

八文字自笑『けいせい伝授紙子』(宝永7年, 1710), 長谷川強校註『けい
せい色三味線, けいせい伝授紙子, 世間娘気質』(新日本古典文学大系78,
1989年)368頁

- (97) 本来の塚(あづち)の画像に以下のものがある。

14世紀—『男衾三郎絵詞』全1巻, 小松茂美編『男衾三郎絵詞』(日本の
絵巻続18, 1992年)16・17頁

元禄8年(1695)—中村惕斎『頭書増補訓蒙図彙』巻9, 国立国会図書館蔵
宝暦5年(1755)—窓梅亭可耕『艶庭訓後編』, 角川書店編集部編『日本名
所風俗図会 別巻』220頁

宝暦13年(1763)—鈴木春信『絵本諸芸錦』上, 藤沢紫編『鈴木春信絵本全
集』影印編1(2003年)334・335頁

宝暦・明和期—鳥居清信画『塚丸男子高野山』, (公財)東洋文庫蔵
安永5年(1776)—勝川春旭画『天狗初庚申』, 東京都中央図書館加賀文庫
蔵

- 安永6年(1777)―鳥居清経画『四天王勇力伝』, 東京都中央図書館加賀文庫蔵
- 安永9年(1780)―鳥居清長『山谷通伏猪の床』, 東京都中央図書館加賀文庫蔵
- 天明8年(1788)―山東京伝『富士の人穴見物』, 国立国会図書館蔵
- 寛政12年(1800)―下河辺拾水画『教庭訓』, 大空社編『絵図集成近世子どもの世界 絵図編』第4巻(1994年)165頁
- 楽亭西馬『稻妻形怪鼠標子』3編上, 東京都立中央図書館加賀文庫蔵
- (98) 柳亭種彦『用捨箱』5・枕箆筭(天保12年, 1841), 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』巻7(1927年)184頁。なお, 享保20年(1735)の発行とされる二代目市川團十郎病気全快のかわら版なるものにあづち枕が描かれるが, 敷布団の形, 台の上に二脚で立つ行灯の形, 書体はどう見ても18世紀後半以降の物であり, 倣古作の類と思われる。西巻興三郎編『かわら版新聞江戸明治三百事件』1(太陽コレクション5, 1978年)23頁
- (99) 注(3)喜多村前掲書巻二上, 『嬉遊笑覧』第4(岩波文庫, 2002年)369頁
- (100) 林美一『時代風俗考証事典』枕と日本髪(1999年)622~624頁
- (101) 菱川師宣, 『吉原恋の道引』(延宝6年, 1678), 近世文学書誌研究会編『近世文学資料類従』仮名草子編35(1978年)303頁
- (102) 空中楼花咲翁『浮寝鳥籠漣』5編下(嘉永7年, 1854), 国立国会図書館蔵
- 喜楽齋笑寿『与謝武郎恋夜話』(安政2年, 1855), 国立国会図書館蔵
- 木枕入り枕箱(安政4年銘, 1857), 矢野憲一『枕』(ものと人間の文化史81, 1996年)121頁
- (103) 鈴木春信『座鋪八景 手拭かけ婦帆』(明和3年頃, 1766), 高橋誠一郎『春信』(1965年)図版24。日本浮世絵協会編『原色浮世絵大百科事典』第5巻(1980年)55頁図版181
- (104) 管見した画像例を記す。
- 明和6年(1769)―司馬江漢『艶道増加々見』, 国際日本文化研究センター・慶応義塾大学アートセンター蔵
- 明和7年(1770)頃―鈴木春信『風流艶色真似糸もん』, 林美一編『春信・湖龍齋』(江戸艶本集成第2巻, 2011年)253頁第13図
- 安永7年(1778)―磯田湖龍齋『馬鹿本草』第1・3冊, 林美一編『春信・湖龍齋』(江戸艶本集成第2巻, 2011年)208頁第19図。国際日本文化研究センター・慶応義塾大学アートセンター蔵
- 天明4年(1784)―勝川春童『大黒上富来福神』, 国立国会図書館・東京都中央図書館加賀文庫蔵
- 天明7年(1787)―虚空山人『古道具穴掃除』, 国立国会図書館蔵

- 天明8年(1788)一勝川春潮『会本和良怡副女』中巻, 林美一編『清長・春潮』(江戸艶本集成第5巻, 2012年)298頁
- 寛政5年(1793)一七珍万宝『馬鹿功』上巻, 国立国会図書館・東京都中央図書館加賀文庫蔵
- 享和期一喜多川喜久磨『艶本婦美車』第1冊, 国際日本文化研究センター・慶応義塾大学アートセンター蔵
- 文政4年(1821)一春亭三暎『十種香菽廼白露』, 国立国会図書館蔵
- 文政8年(1825)一猿猴坊月成『百鬼夜行』上巻, 樋口一貴監修『国貞の春画』(別冊太陽, 2018年)80頁
- 文政12年(1829)一東園明景『源氏思男貞女』うすぐも, 林美一『歌川国貞』(江戸枕絵師集成, 1989年)259頁
- 天保3年(1832)頃一歌川国貞『風俗三国志』2編, 国際日本文化研究センター蔵。福田和彦『色自慢江戸紫・古能手佳史話』(浮世絵グラフィック8, 1993年)106頁
- 天保7年(1836)一溪齋英泉『古能手佳史話』第1冊, 国際日本文化研究センター蔵
- 天保8(1837)頃一歌川国貞『二世紫浪花源氏』第1冊, 国際日本文化研究センター蔵
歌川国貞『吾妻源氏』第3冊, 平凡社『春画』(別冊太陽, 2018年1月)169頁
- 天保期一歌川国貞『春情哀楽図』上巻, 樋口一貴監修『国貞の春画』(別冊太陽, 2018年)70頁
- 天保・弘化期一歌川国貞『金瓶梅』下巻, 樋口一貴監修『国貞の春画』(別冊太陽, 2018年)67頁
- 弘化4年(1847)一歌川国貞『偽女源氏』第1冊, 国際日本文化研究センター蔵
- 嘉永3年(1850)一万亭応賀『庭訓武蔵鑑』初編上, 国立国会図書館・早稲田大学図書館蔵
- 嘉永4年(1851)一松亭金水『正写相生源氏』下巻, 樋口一貴監修『国貞の春画』(別冊太陽, 2018年)26頁
- 嘉永5年(1852)一歌川国盛『艶色品定女』第3冊, 国際日本文化研究センター蔵
- 慶応3年(1867)一二代柳亭種彦『鼠祠通夜譚』初編上, 早稲田大学図書館蔵
- 大正5年(1916)一『大阪パック』第11年第10号3頁, 大阪府立中之島図書館蔵
- (105) なお, 大坂枕と称する箱型の木枕があるが, 類例は少ないので枕の形式

- としては取り上げないでおく。夢中山人寝言先生『辰巳之園』（明和7年、1770）、日本名著全集刊行会編『日本名著全集江戸芸文之部』第12巻（1929年）88頁
- (106) 勝川春章『呼子鳥』（安永4年、1775）、画文堂編集部編『色道取組十二番と呼子鳥秘画帖』（1968年）
勝川春章『色道三津伝』（安永4年、1775）、ehon.detabase
なお、燈籠鬢自体の江戸での画像資料の初現は安永3年（1774）に遡る可能性がある。勝川春好『忠臣蔵六たんめ』、早稲田大学演劇博物館蔵。歌舞伎年表によれば、安永3年5月5日を初日として江戸・森田座で故長十郎十七回忌追善公演として忠臣蔵九段目までがかけられた。春好のものが単純な役者絵ではなく、舞台光景を忠実に描写するのは恐らくそのためかと推察する。ゆえに、燈籠鬢らしき髪型の描写が小さくていささか判然としない。伊原敏郎『歌舞伎年表』第4巻（1973年）238頁
- (107) 北尾雪坑斎『笑本春のにしき』第1冊・第2冊、国際日本文化研究センター蔵
- (108) 平出鏗二郎『東京風俗志』上冊（明治32年、1899年）156頁。『明治百年史叢書』第78巻（1979年）中の巻96頁
- (109) 明治25年の記事に「全国を通観するに、古俗の結髪者は断髪者の万分の一にだも及ばず、漸々消滅に帰せんとする勢いあり」と記される。山口花兄郎「男子の頭髪」『風俗画報』38号（明治25年、1892）1頁
- (110) 小杉天外『初すがた』第11（明治33年、1900）、『明治文学全集』第65（1968年）60頁
- (111) 注(104)大正5年の項目参照

**Customs of Common People During the Edo and
Meiji Periods (Cont.): Tea Whisks, Glass
Mirrors, Reading Desks, and Pillows**
**Supplementary Discussion: Customs of Common People
During the Edo and Meiji Periods (Addendum)**

NISHIMURA, Toshinori

Abstract

Continuing from the previous paper, this paper discusses four items related to the customs of the common people during the Edo and Meiji periods: tea whisks (chasen), glass mirrors, Japanese-style reading desks (fuzukue), and pillows.

Tea whisks used for sencha were a low-cost essential item used by the common classes and were sold until the nineteenth century, when sencha improved in quality and no longer required a tea whisk. In particular, the chanting priests (nenbutsu-hijiri) of Kūyadō in Kyoto, whose history can be traced back to the Venerable Kūya, have sold tea whisks in addition to the religious services they provide while wandering throughout cities since the middle ages. Images of these are gathered and classified into three periods.

The transition process from bronze mirrors to glass mirrors fell into the Edo and Meiji periods, but its specific condition is yet to be studied. Based on both literature and pictorial materials, this paper notes that small pocket mirrors and larger full-length mirrors already included a certain proportion of glass products in the Edo era, and that pocket mirrors in particular have been considered to have used domestically manufactured glass. In addition, the paper discusses the state of the transition period in the early Meiji period.

Japanese-style reading desks were not found to have changed greatly until the early Edo period, but Chinese-style desks were introduced in the mid-Edo period, around

the middle of the eighteenth century, and desks with drawers acquired mainstream status from the late Edo period in the nineteenth century. These conditions were confirmed by the following pictorial materials over time.

The state of pillows changed greatly with the arrival of the vertically oriented wooden pillow (box-supported pillow) in the early Edo period around the middle of the seventeenth century and the trapezoidal azuchi-makura in the mid-Edo period around the middle of the eighteenth century. The fact that wooden pillows and azuchi-makura appeared in response to changes in women's hairstyles in particular is discussed from ukiyo-e and other pictorial materials.

Furthermore, both literature and pictorial materials indicate that, just like traditional women's hairstyles, the use of azuchi-makura continued until the Taishō era.